

# 尊厳の保持の観点から自立に向けた 生活支援技術の探求

—身じたくの介護について—

前川 有希子

The Pursuit of the Assisted Living Skills for Independence from the Point of Maintaining Dignity

Yukiko MAEKAWA

要旨：介護福祉士には、尊厳をふまえた自立支援を目的にその人の能力を引き出す介護が求められる。生活支援技術にある身じたくの介護とは何かを模索するために4出版社の教科書内容を分析した。結果、身じたくは、人に相対する前の生活習慣である。介護を必要とする人の思いを理解し、羞恥心や自尊心に配慮して生活上の役割を実行するためにTPOにあった整容行為と考える。

キーワード：新カリキュラム 尊厳 自立 身じたく

## 1. はじめに

1988年に施行された「社会福祉士及び介護福祉士法」により介護の専門職種として介護福祉士が国家資格として誕生した。2000年に介護保険制度が施行され、介護サービスは措置から契約に移行された。住み慣れた地域での暮らしが維持継続可能となる尊厳を守る介護が求められるようになり、介護専門職には利用者本位のサービス提供、自立支援の視点による個別ケアを提供する、ことと改革された。

2003年高齢者介護研究会が、『2015年の高齢者介護—高齢者の介護を支えるケアの確立について—』<sup>1</sup>報告書を発表した。団塊の世代が高齢者の仲間入りする2015年までに実現すべきことを念頭においた報告書である。その基本理念は「高齢者の尊厳を支えるケア」である。さらに2007年の法改定では、介護福祉士の行う介護の定義規定が「入浴、排せつ、食事その他の介護」から「心身の状況に応じた介護」に改められ、利用者とその家族に対しての相談援助を含めた生活を支援する専門職種として社会的に必要とされる資格として位置づけられた。介護福祉士の義務規定には誠実義務が加わり「その担当する者が個人の尊厳を保持し、その有する能力及び適性に応じ自立した日常生活を営

むことができるよう、常にその者の立場に立って、誠実にその業務を行わなければならない<sup>2</sup>」と国家資格保有者としての人間性や職務倫理をも見直し、「求められる介護福祉士像<sup>3</sup>」を明確に示した。その1項目は「尊厳を支えるケアの実践」である。

表1 求められる介護福祉士像

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>①尊厳を支えるケアの実践</li><li>②現場で必要とされる実践能力</li><li>③自立支援を重視し、これからの介護ニーズ、政策にも対応できる</li><li>④施設・地域（在宅）を通じた汎用性ある能力</li><li>⑤心理的・社会的支援の重視</li><li>⑥予防からリハビリテーション、看取りまで利用者の状態の変化に対応できる</li><li>⑦他職種によるチームケア</li><li>⑧1人でも基本的な対応ができる</li><li>⑨「個別ケア」の実践</li><li>⑩利用者・家族・チームに対するコミュニケーション能力や的確な記録・記述力</li><li>⑪関連領域の基本的な理解</li><li>⑫高い倫理性の保持</li></ol> |
|--|

出典：厚生労働省「介護福祉士のあり方及びその養成プロセスに関する検討会報告書」より作成

今後、高齢化が進行し、理解する能力や判断する能力に支障のある認知症高齢者がますます増加していく。彼ら個々の人権や価値観を踏まえ、尊厳を保持したケアが求められる。2009年より介護福祉士養成教育に新カリキュラムが導入され、「求められる介護福祉士像」に到達するために「資格取得時の達成目標」<sup>4</sup>が提示された。

新カリキュラムの構成は、「人間と社会」、「介護」、「こころとからだのしくみ」の3領域から成り立っている。「介護」領域の中核をなす科目として「生活支援技術(300時間以上)」は構成されている。利用者理解を深め、自立支援を踏まえた生活援助が求められ、生活支援技術の授業時間数が旧カリキュラムの「介護技術」より増加した。その内容は、尊厳の保持の観点から、どのような状態であっても、その人の自立・自律を尊重し、潜在能力を引き出し見守ることも含めた適切な生活支援技術を用いて、安全に援助できる技術や知識を習得する。生活支援技術で学ぶ内容は、自立に向けた居住環境の整備、身じたく、移動、食事、入浴、清潔保持、排泄、家事、睡眠、終末期の介護である。

現状、介護現場の介護職員のすべてが介護福祉士資格保有者とは言える状況にない。将来的には介護業務を担う者は介護福祉士資格が必須となるであろうが、現在のところは介護福祉士養成教育を受けなくとも介護の仕事に従事することが可能である。今後、実務経験を積んだ介護職員にも、実務者研修の修了を必須として国家試験を受験することとなる。介護福祉士資格を有する為には、複数のルートがあるも、全てにおいて教育を受けたのち国家試験を受験する事となった。これは、介護福祉士の社会的地位の向上につながる。

## 2. 背景

介護サービスを提供するためには、利用者の生活に介入していくことになる。従来の「介護技術」では、日常生活動作(以下ADL)である起居動作、食事、排泄、入浴、整容、更衣等の生活行為が断片的に構成されていた。新カリキュラムでは、尊厳保持の価値観を持ってICF(国際生活機能分類)によるアセスメントにより利用者の能力を引き出す適切な生活支援技術を習得する。

尊厳を保持するための生活支援の中でも、自立にむけた身じたくの介護に着目した。広辞苑第6版による

表2 介護福祉士資格取得時の達成目標

①他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける
②あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する
③介護実践の根拠を理解する
④介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる。
⑤利用者本位のサービスを提供するため、他職種協働によるチームアプローチの必要性を理解できる
⑥介護に関する社会保障の制度、政策についての基本的理解ができる
⑦他の職種の役割を理解し、チームに参画する能力を養う
⑧利用者ができるだけなじみのある環境で日常的な生活が送れるよう、利用者一人ひとりの生活している状態を把握し、自立支援に資するサービスを総合的、計画的に提供できる能力を身につける。
⑨円滑なコミュニケーションの取り方の基本を身につける
⑩的確な記録、記述の方法を身につける
⑪人権擁護の視点、職業倫理を身につける

出典：厚生労働省「介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」より作成

表3 教育体系 各領域の内容

領域名	教育内容と目的
人間と社会	基盤となる教養や倫理的態度の涵養に資する
こころとからだのしくみ	多職種協働や適切な介護の提供に必要な根拠を学ぶ
介護	尊厳の保持と自立支援の考え方を踏まえて生活を支えることを学ぶ
3領域の関係	「介護」に必要な周辺知識を「人間と社会」「こころとからだのしくみ」で学び、その人らしい生活を支えるために必要な介護福祉士としての専門的技術・知識を「介護」で学ぶ

と、『「身じたく」とは身なりをつくろい整えること。身拵え。「身なり」とは体つき、衣服をつけた姿、よそおい。「身だしなみ(身嗜み)」とは身のまわりについての心がけ、頭髮や衣服を整え、言葉や態度をきちんとすること。「整容」とは姿を整えること。姿勢を正しくすること。「おしゃれ」とは、みなりや化粧を気のきいたものにしようとしてつとめること。』とある。整容は他人から見える外見・姿・姿勢を整えることであり、おしゃれは気の利いたものとしてその場にあわ

せた身なりをしようと努めることであり、身だしなみは心がけや言葉、態度までも含んでいる。身だしなみや整容は衣服や頭髪を整えその人自身を良く印象つけるためのものであるが、身じたくは目的のある行動を実施するために身なり、身だしなみを整える事である。すなわち、介護を必要とする人が、日々の暮らしの中で、何か目的を持った行動をおこし、誰かと出会い、喜怒哀楽などの感情を表現する。身じたくとは、その日の行動前に行われるケアであり、意欲や生きる喜びを引き出す行為である。そして、恒常的に同一ケアをするのではなくTPOに添った支援が必要となる。自宅や居室に閉じこもることなく、地域と人とかかわりを深め、個性を発揮することができる介護が身じたくの介護である。

### 3. 先行研究

2009年度より施行された新カリキュラムに関する研究では、新旧カリキュラムの「介護技術」と「生活支援技術」を比較した論文がある。永田・古川<sup>5</sup>は、内容構成及び時間の配分に検討する余地がある一方、「学内授業」と「介護実習」を繰り返すことが有効であり成長が伺えると示唆している。佐藤・中澤<sup>6</sup>は、ドイツ老人介護士養成教育と比較した結果、実践力としての知識やスキル等の実際に活用する能力を十分に習得することは難しいという。生活支援技術の各論について、中川・神部<sup>7</sup>は、新旧カリキュラムに含まれる家政学の各領域を比較し、新カリキュラムの家政学教育について①授業内容の項目数や授業時間の不足、②体系的・理論的知識となっていないこと、③応用性に乏しい、と課題を提示した。生活支援技術の移乗・移乗技術教育について、伊藤<sup>8</sup>は新旧のテキストを比較し自立支援の理念は教育に含まれたが、具体的な介護方法については開発が必要としている。また、磯邊・小田等<sup>9</sup>は入浴・清潔保持の生活支援技術の教育方法として、生活過程の連続性を意識し、要介護者の状態に応じた支援をするという観点で統合演習を位置づけ教育内容や方法を検討する必要があると言っている。

高齢者へのおしゃれや美容に関する研究では、足立は、おしゃれに関する教育内容と意義の実態調査を行った。現行カリキュラムの中でおしゃれの科目設定はしておらず、専任教員での授業展開をしている養成校は僅かであった。しかし、介護福祉士養成カリキュラムが改訂されたこととおしゃれに対するニーズが多いこ

と<sup>10</sup>が問題提起されている。石塚・小川<sup>11</sup>は、施設入所高齢者のおしゃれへの関心と動機を明らかにする調査により、高齢者には個性豊かなおしゃれへの思いがあることを把握した。化粧や装飾品などの特別な行為よりも、整髪、肌を整えるなどの身近な整容行為に関心が高い。施設職員は、その思いを知り日常的に行うことができるおしゃれを意識して援助する必要性があると述べている。野澤は、超高齢社会の中で高齢者に対して美容はどのような役割を果たすかを探求した。結果、「高齢であっても、障害があっても美容を楽しむ、人生を楽しむ権利があるという人間尊重主義の理念を理解する必要性と、楽しみたいときにおしゃれや美容ケアを楽しむことができる多様性をみとめる社会の成熟を期待する<sup>12</sup>」としている。

旧カリキュラムではおしゃれを学ぶ科目設置がなく、高齢者のニーズを把握してもおしゃれや美容については生活行為を構成する項目として、養成教育中の位置づけがなされていなかった。また、生活支援技術は「こころとからだ」や「介護の基本」と重複連動し学習できるも、従来の家政学教育の内容が希薄であり体系的でない、新カリキュラムに対しては課題提起するものが多く、資格取得時の到達目標を達成できるよう検討を積み重ね、今後より良いものに学校裁量で特色ある魅力的なカリキュラムになると考える。また、生活行為を支援する中で、人間の尊厳をどう保持するか身じたく介護に関する研究が少数であると明確になった。単なるADL向上のケアではなく、おしゃれや整容、更衣という個性を表現する生活行為と尊厳あるケアとを関連付ける教育方法を模索する。

### 4. 研究方法

尊厳あるケアの確立に向けて、自立に向けた身じたくのケアとは何かを探求する。介護専門職として、利用者の尊厳保持と自立支援を行うための身じたくの支援方法を模索するために、介護福祉士養成教育で使用されているテキストの記載内容を比較し、それぞれの筆者が求める尊厳を守る身じたくのケアについて分析する。

本研究に使用したテキストは、4出版社の「生活支援技術」の教科書である。

## 5. 結果

表4に示すように「生活支援技術」各テキストの冊数や項目数、ページ数は異なる。また、「身じたく」の意義の解釈や身じたくを構成している行動のとらえ方にも若干差を見ることができる。Aでは「衣服を身につけ、おしゃれをし、身なりを整えること」とし、Bでは「日常生活における様々な活動をするための準備であり、生活のリズムを作ることになる」と言っている。Cでは「朝起きてから夜寝るまでに行われる様々な生活行為として習慣化され、他人に顔を合わせるときのエチケットである」と生活習慣であるとしている。Dは、「身じたく」を「身だしなみ・化粧」と「着る・装う」と別の章立てを構成している。「身だしなみ・化粧」を基本的な生活習慣や社会的なマナーや健康を保持・増進するために教育された生活行動とし、「着る・装う」を単に身体を覆うものでなく、人間として内面までも表現できる行動としている。

身じたくの介護について各テキストにある具体的な支援の記載について表5にまとめた。多様な衣生活に関する知識を盛り込んだものや、フットケアを章立てしているもの、洗髪を清潔・入浴の章に組み入れたなどそれぞれに特徴がある。口腔ケアについては、頁数に差があることがわかる。筆者、编者、監修者の尊厳ある介護への思いをくみ取ることができる。衣類の着脱の項目には、いずれの教科書も写真やイラストを用いて介護手順を明確に示している。衣類をどう着せるか、脱がせるかという介護者主体の介助方法ではなく、保

有能力を活用し、できない部分のみを支援する自立支援介助についての記載がある。見守りや一部介助の支援方法が多く、そのため全介助方法の記載のないものもある。更衣に関する項目では、モデルが着用している服やイラストでは、日常着やパジャマが主流である。日常と異なる「ハレ」の日についての記述はあるも、ワイシャツ・スーツやワンピースの着用については書かれていない。身じたくは、外出支援や閉じこもり予防に関連付けた記述内容がある。しかし、提示されている服装は室内着である。靴や靴下に関する記載が薄い。また、鞆やバック、帽子等の外出時に必要な身の回り品についての記載も乏しい。障害があっても着用しやすい服のリフォームや、自立支援の視点から福祉用具に関する記述も少ない。

全てのテキストが、第1章に生活の定義を学習する。生活を支えるとは何か、生活支援の考え方、生活新技術の意義と目的を学ぶ。ICFのアセスメントの視点を理解する。第2章には、住まいや生活空間の住環境についての内容を含む介護の必要な人の安全で安心、快適な空間を学ぶ。在宅、施設の居住環境の知識を得る。身だしなみのケアは、椅子での座位、ベッドサイドでは端座位、全介助での更衣は側臥位・仰臥位等の姿勢をとる。しかし、起居動作・移動介護はほとんどのテキストでは身じたく介護の後に置かれている。人の身体の動きかたや姿勢を学ぶことより、身じたくを優先している教科書がある。

表4 新カリキュラムテキストの諸元

	書籍名	初版発行年月	総項目数	総ページ数	該当章
A	生活支援技術 I・II	2008年12月	21章102節	718頁	I - 第3章
B	生活支援技術 I・II・III	2009年2月	17章54節	914頁	II - 第2章
C	生活支援技術 I・II	I 2009年7月 II 2009年11月	19章94節	502頁	I - 第3章
D	生活支援技術 I・II・III・IV	2009年3月	23章161節	790頁	I - 第3章 III - 第2章

表5 身じたく介護の記載内容

	A（生活支援技術Ⅰ）	B（生活支援技術Ⅱ）	C（生活支援技術Ⅰ）	D（生活支援技術Ⅲ）
洗顔	(1) スキンケアの記載	洗面(4) 顔の拭き方をイラスト 一部介助・全介助事例	(1) 顔の拭き方をイラスト	「身だしなみ・化粧」の章、 意義・目的、ICF,環境因子・ 個人因子の記載 「こころ」と「からだ」と の連動 洗髪、洗顔は入浴単元 スキンケアの記載 口腔ケア(4) 化粧(1)、ひげ剃り(1)、 爪の手入れ(1) 整容・口腔ケアの自助具
洗髪	(2)	入浴単元	就床者の洗髪、ケリーパ ットの作り方(3)	
整髪	洗髪後のドライヤー	ブラッシング(1)		
化粧	アロマの特記(2)	(1)	化粧の手順(2)	
ひげの手入れ	(1)	全介助事例(2)	(1)	
口腔ケア	口腔の清潔(19) 間接的口腔ケアと直接的口 腔ケア、口腔体操 入れ歯の手入れ	意義・目的(22) ケアの基本歯ブラシ、洗浄、 義歯 口腔体操、機能回復 口腔ケア用具・自助具	(2)	
爪の手入れ	爪の清潔とネイル(1) 爪の理解と手入れ フットケアの知識を別章(15)、 施術時の姿勢、手順 足爪のトラブル等	手足の爪切り写真掲載 巻き爪、フットケアの特記 あり(3)	(2)	
更衣	衣類の脱着(7) かぶり,前開き,浴衣 左片麻痺の事例	衣服の着脱(21) 衣服の種類と選択 自立度が高い・一部介助・ 全介助事例 前開き,かぶり,浴衣 右麻痺の事例	衣生活知識(8) おむつを下着と表記、洗濯、 保管方法 丸首シャツ,前開き,セー ター・トレーナー,ズボン, ポロシャツ、右麻痺事例 全介助事例の表示なし	「着る・装う」の章 着脱しやすい、リフォーム・ オーダー対応 左・右麻痺事例 かぶり、前開き、寝巻 靴・靴下の履き方 自助具・福祉用具
その他	耳の手入れ 心身機能に応じた介護技術 のテキストあり	皮膚の清潔(軟膏塗布、湿 布の貼付)点眼 整容や口腔ケアの自助具を 多数掲載	基本編の他、障害編のテキ ストあり	目・鼻・耳の清潔 心身機能別(見守り・予防、 一部介助、全介助)のテキ ストあり

## 6. 考察

我々は、幼少期より生活習慣として洗顔、歯磨き、衣類を整える行為を習慣としている。職業を持つ人は、その職務を担うための身じたくを整えたのち就業する。それは、人に対して好印象を与えるマナーだけでなく、医師や警察官など職業の権威を表現し、使命や責任を果たすための意思表示である。介護施設で生活する高齢者も同様である。食事をとるために食堂に向かう、テレビを見るためにホールに向かうなど、多くの人と出会う前に身だしなみを日常的な習慣として行う。また、幼児や児童たちの訪問時には、高齢者たる姿を見

せ年齢を重ねることを学習する社会的な役割を持っていると考える。身じたくは、社会的役割を遂行するために必要不可欠である。そのため、従来の家政学領域の衣生活の支援や外見や印象を良くするためのケアが、尊厳保持の視点からの自立をめざした身じたくの介護とは言い難い。また、尊厳とは人に対する姿勢である。尊厳を支えるケアとは、身体的自立のみならず精神的自立支援と、人間性の尊重を目的として提供するものである。ADLの向上だけではなく、ICFの視点による「活動」や「参加」を拡大するための、能力向上や生活上の役割を実行していく支援のあり方を考える力

が求められる。介護を必要とする人を感情のある人と理解し、その人の立場や思いを受け入れ、生活をつくり上げる働きかけをその人と共に、積極的に包括的に支援することが尊厳ある介護と考える。例えば、認知症の人が表現する力を失って自分の思いを人にわかるように表現できないことを、能力がないから思いがないと判断するのではなく。記憶力や表現力がなくても思いはあると受容することである。このことが尊厳保持と自立支援を行うための身じたくケアの基本と考える。

そのために、介護技術としての身じたく介護のスキルに加え、人間としてのライフステージを踏まえ、その人の生活歴や嗜好より個別な思いを引き出す能力が必要である。柴田は、「尊厳の保持とは、非人間的な扱いはしない、屈辱的な扱いはしない、さらに意欲を引き出すこと、と定義つけられる」<sup>13</sup>と言っている。介護を必要とする人が、社会的な役割を達成するために、その場、その時に合致した身だしなみを整え、恥かしさや悔しさを感じることなく人に相対し、満足した時間を持つことができるための支援が身じたくと考える。

生活行為は、身じたくのみ、排泄のみと断片的に生活場面で実施されることはない。時間の流れと連動して生活は動いている。身じたくの介護とは、単に清潔な服の着用や恥ずかしくない整容をすることではなく、介護を必要とする人が地域社会や人と関わるためにその場にあった外見や身だしなみを整えるとともに、社会の一員として生活する役割を達成する態度や心情までも支援することである。身じたくが整えば、人との交流が円滑になり、生活意欲が向上できる。そのために、介護福祉士はその人の習慣や嗜好を含めたアセスメント能力やコミュニケーション能力、外出を支援する知識が生活支援技術とともに必要となる。介護を必要とする人の心理的理解とともに身体やしぐみや動き方を知り、移乗・移動介護やコミュニケーション技術等と連動して学習することが効果的である。さらに、四季を楽しむ行楽行事や家族との時間を過ごすために自宅や介護施設から外出するなど、非日常のハレの衣生活の知識や化粧品や装飾までものおしゃれに関する知識があれば、介護を必要とする人のQOLが向上できる。生活を支援するために有する知識は幅広く、日本の生活文化や地域性の理解、十人十色の生活のあり方を理解することが必要と考える。分析した各テキスト

は、筆者や編者が将来の介護福祉士に対する期待がこめられている。生活に関する知識を幅広く獲得して欲しい、介護を必要とする人に積極的に向き合ってもらいたいとの思いを感じることができる。

## 7. おわりに

教科書を有効活用し授業展開し、尊厳の保持の観点から自立に向けた生活支援技術を伝えるべく、教員の人間性や教育力を向上するための自己研さんが不可欠であることを痛感した。

## 引用文献

- 1) 高齢者介護研究会：2015年の高齢者介護 - 高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて - ,厚生労働省老健局 (2003)
- 2) 厚生労働省：社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律 平成 19年 12月 5日 公布
- 3) 厚生労働省：介護福祉士のあり方及びその養成プロセスに関する検討会報告書(2006)
- 4) 厚生労働省：社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて (2008)
- 5) 永田智子・古川順：介護福祉士養成校における生活支援技術の授業内容に関する研究 (2) - 学生からみた生活支援技術の授業内容の成果と課題一, 兵庫教育大学研究紀要, 39, 213-223 (2011)
- 6) 佐藤真・中澤秀一：介護福祉士養成教育におけるカリキュラム研究 - 「資格取得時の介護福祉士養成の目標」の資質習得における課題, 兵庫教育大学研究紀要, 37, 1 - 7 (2010)
- 7) 中川英子・神部順子・奥田都子他：生活支援と家政学 - 新カリキュラムにおける家政学教育の課題一, 介護福祉学 16(2), 189 - 208 (2009)
- 8) 伊藤健次：移乗動作技術教育の変遷に関する研究 新カリキュラムにおける介護技術教育 - その1 - 山梨県立大学 人間福祉学部紀要 6, 71-75 (2011)
- 9) 磯邊実代・小田栄子・藤田美知枝：「介護」領域における生活支援技術の教育方法と今後の課題 - 自立に向けた入浴・清潔保持における生活支援技術演習を通して - , 近畿医療福祉大学紀要, 12(1), 147-156 (2011)
- 10) 足立香織：介護福祉士養成施設における「おしゃ

れ」についての教育の現状,介護福祉教育 10(2),  
43-49 (2005)

- 11) 石塚敦子・小川妙子：施設入所高齢者のおしゃれへの関心と動機 順天堂大学医療看護学部 医療看護研究 2(1), 11-16 (2006)
- 12) 野澤桂子：高齢社会における美容の可能性 山野研究紀要, 18, 11-17 (2010)
- 13) 介護福祉士養成テキストブック⑥生活支援技術 I, ミネルヴァ書房, 2009 p 7

# 焼津のかつお節産業

岩本 勇

The Dried Bonito Industry in Yaizu

Isamu IWAMOTO

## 要約

現在の焼津は、全国でも有数のかつお節の生産地として知られている。その地位を築いたのは、明治、大正期に入ってからであり、かつお節産業の歴史からすると比較的新しい生産地である。

焼津がかつお節生産を成功させた要因は、関西と関東の生産技術を学び新しい製法に成功したこと、焼津港から大量且つ新鮮な鰹を豊富に調達できたこと、東海道本線（鉄道）の開通による物流網を得ることができたことなど、商品の優位性のみならず、マーケティングに適合した立地特性を見逃してはならない。

現在の焼津のかつお節産業は、グローバル化の進展、価格競争の激化、人口減少によるマーケット縮小によって苦戦を強いられているが、原点に立ち返り、新しい産業開発に向けて、飽くなき挑戦を続けている。

キーワード：産地、焼津かつお節、本枯節、地域ブランド

## はじめに

静岡県焼津市は、東京から西へ約193キロメートル、名古屋から東へ約173キロメートル、京浜・中京のほぼ中間に位置する。静岡県の中央部で、北は遠く富士山を臨み、高草山（501メートル）、花沢山（449メートル）などの丘陵部を境に県都静岡市に接し、東に駿河湾を臨み、西南は一望に広がる大井川流域の志太平洋野で、西に藤枝市、大井川を挟んで吉田町と島田市に接している。

年間平均気温16.5度、冬季の降雪もまれな温暖な気候で、面積は70.62平方キロメートル、北部山間部を除き平坦な区域に現在、約5万4000世帯、約14万7千人の市民が生活している。

この焼津は、かつおの歴史がたいへん古く、今から約1400年前の弥生時代にまでさかのぼる。それは焼津神社周辺の「宮の腰遺跡」から発掘された遺物に端を発し、この遺跡から土器類や剣・鏡・勾玉などの土製模造品、米などの食糧品に混って魚の骨片が出土した。そして、その骨片は古考学者の鑑定によって「かつお」

の骨であることが分かった。その当時、焼津一帯の集落の人々が米食をし、かつおを獲って食べていたことが証明された。このことから焼津は、大昔から「かつお」とは切っても切れない縁の深い町であると考えられる。

現在の焼津は、全国でも有数のかつお節の生産地として知られるようになった。そもそも焼津地域は遠洋漁業の焼津港、近海・沿海漁業の小川港があり、両港の水揚げ量は全国1・2位を占め、特にかつおの水揚げ量は年間約15万トン、全国水揚げ量の40%以上を占めている。また物流面からみた立地条件も関東と関西の中間に位置しており、これらの地の利を活かした焼津は、水産加工業が発展した総合水産都市へと進化した。

さて本稿では、総合水産都市焼津の主要産業であるかつお節製造に焦点を当て、考察を進める。日本におけるかつお節産業の歴史と焼津における産業形成、そして現在、将来を展望したい。



## 1. かつお節の歴史

### 1-1. かつお節の前身

大和朝廷草創（4～5世紀）以前に、古代人は「干しかつお」と「堅魚煎汁<かつおノイロリ>」を創案している。干しかつおは、かつおを素干にしたもの（堅魚）と、煮てから干したもの（煮堅魚）である。煎汁は、煮堅魚の煮汁を煮詰めて作ったもので、調味料として使われた。

日本列島沿岸で豊富に漁獲されるかつおは、タンパク源として重要な位置にあり、大和朝廷は国々にかつお浦を定めて、干しかつおと煎汁の献納を強制した。特に煎汁は、大陸伝来の調味料（未醤<ミソ>・醤<ヒシオ>・酢等の発酵性調味料）と肩を並べる純国産調味料として、飛鳥・奈良・平安時代を経て、鎌倉・室町時代まで重用された。

かつお節は『古事記』に「型魚」という言葉で登場する。『大宝律令』や『養老律令』、『延喜式』には「堅魚」、「煮堅魚」、「堅魚煎汁（かたうおいろり）」などと記され、平安朝以前には、伊豆・とさ・紀伊など10カ国から朝廷に貢納されている。神社などの棟木についた飾りを「堅魚木」とも呼んでいるところからも、そもそもかつおが昔から重宝され、朝廷への献上や神へのお供え物として、高い評価を得ていたと考えられる。

その後、室町時代になって農業の進歩により、大豆の生産が増加すると、大豆性調味料の使用量が増え、その分煎汁の使用量が減り、消滅していった。しかし、かつおの調味料の味は、人々の脳裏から消え去らず、干しかつおから焙乾法の出現により生まれたかつお節に引き継がれることになり、日本人の調味料として不動の地位を確立する。

### 1-2. かつお節の出現

室町時代に入り、干しかつおに「焙乾」という技術が導入され、「かつお節」が生まれた。江戸時代に入る前から焙乾小屋は、五島・平戸・紀伊・志摩・土佐各国のかつお浦に建てられた。当初の焙乾設備は台所兼用のもので、囲炉裏の上にしつらえた平籠に卸したかつおを入れておくと、煮炊きをする熱と煙により自然と焙乾されるものであった。江戸時代初頭には、北九州方面で作られたかつお節は、ポルトガル船・イギリス船などにより、平戸から琉球を経て、明国・シャム国などに輸出された。

その後、かつお節が広く世間で名声を得たのは、紀

州で焙乾小屋が改良され、かつお節が進歩を始めてからである。堺港の大商人や、京の都の上流家庭で、煮物・汁物料理が盛んになり、従来の調味料だけでは物足りなくなり、旨味を付加するためにかつお節がだしとして用いられるようになった。

江戸時代初期は、この紀州で作られたかつお節が「熊野節」の名で一世を風靡した。ちょうどこの時期にたくさんの料理書が発刊され、その中で調味料としてかつお節だしについて触れぬものはないほど必需品であった。

### 1-3. 紀州甚太郎

江戸期になると、かつお節製造方法の記述が散見できる。『本朝食鑑』（1697（元禄10）年）や『和漢三才図会』（1712（正徳3）年）では、かつおを煮熟して曝乾（ばくかん）したという記述が見られる。そして、『日本山海名産図会』（1799（寛政11）年）では、藁火を用いて燻したという具体的な記述がある。そして、かつおの腸などの内臓を塩漬けした酒盗（塩辛）の記載もある。

さて、燻煙によるかつおの加工の方法（燻乾法）が開発されたのは江戸中期である。それまでは、煮たかつおを天日と火熱で乾かす方法（焙乾法）がとられていた。燻煙加工は紀州の印南浦（現在の和歌山県印南町）出身の甚太郎という漁民が1674（延宝2）年に土佐の宇佐浦（現在の高知県土佐市）で初めて行ったと伝えられている。

彼はかつお群を追い求めて足宇摺沖へ出漁した時に時化で遭難し漂着した宇佐浦に住み着いた。播磨屋佐之助の支援を元に節製法を伝授したという。土佐藩では、このかつお節を藩の秘法の貿易品にしようと考え、熊野節の製法を積極的に取り入れた。

甚太郎は焙乾（燻乾）の創始者でもある。元禄時代（1688）前後から安永（1780）のころまでに大きな改良が行われ、煮熟・焙乾・カビ付けの草案に及び、改良節とも呼ばれた。

それまでは藁を用いた火乾だったが、ナラ・クヌギ等の薪を使い、煙で燻す焙乾法を考案した。また土佐節は、カビが生え易い欠点があり、いったん生えたものは大変カビ臭く、評判を落とした。力を入れてきた土佐藩にとっては大問題であり、改善しなければならぬ課題であった。

対策としては、(1)焙乾を徹底し、日乾を併用する (2)カビ気退治のために、逆にカビを利用する（日乾した

節をコモで包み、体一面にかつお節カビを付着させることにより、悪カビの発生を防ぐ」というものであった。その後、「土佐節」はかつお節の大消費地・集散地であった大坂で、主力商品となっていく。

以上の加工方法により、土佐から大坂さらに江戸までの、長い輸送にも耐える改良土佐節が完成した。この製法は秘伝とされ、甚太郎の故郷紀州熊野に伝えられた程度で、永年他国へは公開されることはなかった。

しかし、薩摩藩は土佐節の改良に関わった紀州印南漁民の一人を招くことに成功し、その秘法を入手することができた。これによって、熊野節をしのぎ土佐節に次ぐ優良節として「薩摩節」は天下に知られるようになった。

#### 1-4. 土佐与市

江戸の後期に、紀州印南浦の住人で、土佐与市というかつお節職人が、安房（1781）・伊豆（1801）の両国に改良土佐節を紹介した。これを熱心に取り入れた伊豆では、土佐節の製法を見習った上で、カビ付けの回数を2～3回以上行い、脂肪や水分を節の中から吸い出す製法を生み出した。「伊豆節」の誕生である。その後、土佐節とならび、伊豆節は全国的に高い評価を受けることとなった。

「焼津節」は、直接与市から技法を授かっていないが、その起源は伊豆の改良節とされ、与市によって伝えられたと言われている。その後、改良節は全国に広められていくことになる。後年、与市は望郷の念禁じがたく、故郷の紀州印南に立ち帰ったが、秘法を他国へ漏らした罪により、追い返されてしまう。房州千倉に引き返し、親交のあった渡辺家に身を寄せたが、文化12年3月23日、ちょっとした風邪が原因で、58才で他界する。

#### 1-5. 本枯節（焼津節）の登場

江戸時代に由緒ある製品として知られていたのは、熊野節・土佐節・薩摩節である。明治時代に入ると伊豆節が目覚ましい発展を遂げ、土佐節・薩摩節・伊豆節が三大名産品と称されるようになった。

全国各地で生産されるかつお節は、その産地ごとの製法に特徴がある。現在は、静岡県焼津の製造方法を基本にして制定された焼津節（改良型本節）と、鹿児島県の枕崎で古来より受け継がれている薩摩節（薩摩型本節）がある。焼津節が改良節として中心的な製造方法となったのは、明治30年頃、土佐節と伊豆節の長所を取り入れ、徹底した焙乾と3～6回のカビ付けを

行った「本枯節」を開発したことによる。この焼津節が登場してからは、かつお節業界の本流となった。

また焼津節（改良型本節）の形態的な特徴は、頭の部分がくびれていることである。これは、かつお節を保存する時に縄で吊るし易いように、このような形にしたという説が有力である。

一方薩摩節（薩摩型本節）の大きな特徴は、生切りで頭を落とす時に、約45度の角度で切り落とすことである。前述のように、焼津節はくびれているので、すぐに見分けがつく。また、製造工程の中で大きく違うのは、焼津節が煮熟後に水槽の中で骨抜き・皮剥きを行うのに対して、薩摩節は、生切りの段階で、皮を剥き・骨を包丁でそぎ落とすことである。

#### 1-6. かつお節の削り加工

大正元年（1912）、広島県福山市の海産物商富士ワ安部商店主 安部和助が、煮干しを機械的に削り、紙袋または紙箱に入れて、「削りかつお」の商品名で発売した。大正10年頃には、職人が300人で毎日20トン削り、副業に容器の袋張りをする者だけでも、200～300人もいたそうである。

最初は、煮干しからスタートしたが、その後はかつお節も削られ、「花かつお」の呼称で現在に至っている。この削り節の出現で、消費者の労力は軽減されたが、日持ちと味に問題があった。節に含まれる脂肪が、削るとすぐに酸化すると、その酸化により生成される過酸化物質により、2次的な作用が同時に進行し、色素・たん白質・香気成分などに変化を与え、脂やけを起こす。削り節は節と比べて表面積が大きいため、酸化の影響が大きく、劣化のスピードは非常に早い。

この弱点を解決する商品が、昭和44年に（株）にんべんより発売された。これは、削りたての品質を維持するためには酸素を除去し、不活性ガスによる置換包装を行うことによって解決された。パッケージ技術の進歩である。この技術革新によって、消費者向けのかつお節流通はパック詰めの商品に変化した。

## 2. 焼津かつお節産業の生成と歴史の変遷

### 2-1. 焼津とかつおの歴史

焼津は現在、全国でも有数のかつお節の生産地として知られている。焼津とかつおの歴史は、今から1400余年以前の弥生時代にまで遡る。その当時、焼津一帯の集落の人々が米食をし、かつおを獲って食べていたことが証明された。それは焼津神社周辺の「宮の腰遺

跡」から発掘された遺物に端を発している。この遺跡から土器類や剣・鏡・曲玉などの土製模造品、米などの食糧品に混じって魚の骨片が出土された。そして、その骨片は古考学者の鑑定によって「かつお」の骨であることが判明した。このことから焼津は、大昔から「かつお」と切っても切れない縁の深い町であることが伺える。

延長5年(927年)に醍醐天皇の命により撰集された「延喜式」(平安時代初期の法律・社会を知る重要な文献)に、駿河国焼津浦より堅魚(かたうお)煮堅魚(にかたうお)、堅魚煎汁(かたうおいろり)の貢租があったと記述されている。また奈良の正倉院に保存されている「駿河国正税帳」という古文書のなかにも、焼津を中心とした地域が煮堅魚の特産地として記録されている。堅魚や煮堅魚は、かつおを素干ししたり、煮て日干したもので、今の「かつお」のルーツと考えられている。これらの文献を通してても、焼津の「かつお節」の発祥はかなり古く、土地の産業として根を下ろしていたことがわかる。

現在一般に使われている名称は、戦国時代から江戸時代初期の間に変わったものと考えられる。しかし、当時のかつお節は現在のかつお節とは相当な違いがあったようだ。

その後、延宝2年(1704年)に紀州(和歌山県)の漁師である甚太郎がみだした「燻乾法」が、現在のかつお節という言葉の起源と言われている。焼津においては徳川三代将軍家光時代の、当地方の田中城主(藤枝市にあった)松平伊賀守忠晴が遺した古文書、寛永19年(1642年)の「萬覚」と「駿河田中城中覚書」の中に、田中領分にあるものとして、「かつお節」の名称が残されている。これらの史実からみると焼津では、すでにそれより50年余早く「かつお節」の名称が用いられていた。

## 2-2. 大坂と江戸

国土の狭い日本だが、大坂(関西)と江戸(関東)で色々な文化が異なっている。かつお節に関しても大坂と江戸では違いが見える。

西の主要生産地である土佐・薩摩は、天下の台所である大坂へかつお節を輸送する際に、発生するカビに悩まされた。その後、長年の製造経験の中から、節の表面に良カビを生やすことにより、悪カビが生えることが出来ない環境にしてしまうという、苦肉の策が考えだされた。「毒をもって毒を制す」の諺どおりの製

法で、このカビ付けは1回だけ行われ、「節一乾」と言う。このかつお節が、大坂の味の文化として今でも受け継がれている。

また、大坂に集められたかつお節は、江戸を中心として各地に「下りもの」として流通した。江戸へは海路を使って船で輸送したが、昼は陸を見ながら走り、夜は港につけ、風や雨の日は港で待機をし、回復してから出港するという天候任せの航海だったので、輸送には10日から1ヶ月ほどの時間がかかった。一乾の節はまだ水分が多く、潮風・波しぶきに当たることにより新たなカビが発生した。

また、江戸に到着してから蔵に保管している間もカビが発生し、再三払い落とす必要があった。しかし、「カビが付き、それを払い落とす」の繰り返しの中で、経験的に『かつお節が良質化する』ことに、江戸のかつお節問屋は気がつく。その良質化とは、魚臭さが減少し、旨みが増大して特有の香気 が醸しだされ、だしが濁らなくなる等である。結果的にカビが付くことが繰り返されたかつお節が出回り、江戸の味の文化として定着した。

大坂のかつお節は、悪カビが生えないようにすることを目的にカビ付けを1回だけ行った荒節である。それに対して江戸のかつお節は、美味しく良質化するための目的にカビを数回付けた本節である。カビ付けの目的が違うことによりできた荒節と本節が、東西の味に影響を及ぼしたことになる。

## 2-3. 伊豆節と焼津節

西の土佐・薩摩に対して、東の一大産地は西伊豆の田子であった。伊豆七島の近海でかつお節に適した魚質のかつおがたくさん獲れ、気候風土も合わせてかつお節造りに大変適した土地である。ここで生産される「伊豆節」は、大坂に送られることがないので、当時の全国的な知名度は土佐・薩摩に及ばないが、江戸のかつお節問屋との直接的な取引で、販路はしっかりと確保されていた。

江戸のかつお節問屋は、カビ付けの効用を田子のかつお節職人に教え、少なくとも3番カビ付けまで行った本節の製造を要求した。田子の職人はこれを難くこなして、先進地土佐のかつお節とは違った独特の「伊豆節」を生み出した。明治初年において、3番カビ付けを完成品とする「本節」の誕生である。

土佐式が、納屋の中に裸節を蔵置して、悪カビの発生を防止する目的で1回のカビ付けを行ったのに対し

て、伊豆では悪カビの発生防止だけでなく、更にかつお節の味を良くする目的を持たせ、3回のカビ付けを徹底して行うことにより、「伊豆節」は天下の名産品の仲間入りを果たした。

その後、明治40年代には、4～6番カビ付けの「本枯節」が出現して完成される。これに合わせて「伊豆節」は、全国的に大変高い評価を受けるようになった。カビ付け方法の足跡の年代設定は、諸説があり明確ではない。明治33年に著されている「静岡賀茂田子かつお製造法」には4番カビ付け以降の記述もあり、明治40年代より前に「本枯節」が造られていたとも考えられる。

「伊豆節」は、駿河湾の対岸に位置する焼津に伝えられ「焼津節」として発展する。焼津は、田子から学んだ製法に更に改良を加え、機械化による大量生産に移行した。かつお漁が遠洋化するのに伴い、焼津港は国内有数の水揚港となり、潤沢に原料の確保が出来るようになった。東海道本線の開通により、東京への輸送ルートも確保され、益々発展を遂げて現在に至っている。

他方、先進地である土佐・薩摩では、江戸がどんどん発展し、その後東京を中心とする東日本のかつお節需要が増大すると、明治40年以降になって東京向けの本節を製造するようになった。

### 3. かつお節の製造方法

#### 3-1. 原魚

かつお節に向くかつおは、本節で4.5～6.0kg、亀節で2.0kgと言われる。魚齢では3歳前後となる。それ以上大きくなると、芯まで乾燥させるのが困難とされる。ちなみに生食用は2.5～4.5kgが適している。

生食用と違い、脂肪分が多いものは不向きで、生肉中の脂肪含有率が2%前後のものが最適とされる。脂肪含有率の高いかつおを用いると「油節<アブラブシ>」になりやすく、香り・味も乏しく出し汁も濁ったものになる。ただし、脂肪含有率が低ければ良いわけでもなく、「ギチ」と呼ばれる脂肪の少ないものは、かつお節の色は真っ赤できれいだか、旨みの乏しいものになってしまう。

冷凍の状態だと難しいが、鮮度の指標はエラで見分けるほか、体側の縦縞がはっきりしている、体型が歪んでいない等が挙げられる。

#### 3-2. 解凍

解凍方法は生産者によってまちまちで、流水に晒したり、水槽に入れて何回か水を入れ替え解凍する。季節によっても解凍時間は変化し、夏場で2回、冬場で3回の水換えで、丸一日の時間が必要である。解凍が不完全なまま加工すると、魚肉に軽石のような小さな穴があいてしまう。最近では、水槽の底部より小さな気泡を噴出させて、水槽内の温度を均一化して、解凍ムラを防ぐ方法が採用されている。

#### 3-3. 生切り・身割り

解凍したかつおを、頭を落として3枚に卸す。頭切りはヘッドカッターで機械化されているが、その後の作業は数種類の包丁を使って手作業で行う。3枚に卸したものを加工すると「亀節」になる。半身を加工することになるので、1尾より2枚作られることになる。それに対して、「本節」用の大きなかつおは、さらに半身を血合いの部分で背側と腹側に切り分ける。これを、合断ち<アイダチ>と言う。すなわち半身から2本、1尾から4本（背側2本、腹側2本）が作られる。背側を背節<セブシ>もしくは雄節<オブシ>、腹側を腹節<ハラブシ>もしくは雌節<メブシ>と呼ぶ。

#### 3-4. 籠立て <カゴタテ>

身割りした節を、煮熟するために「煮籠<ニカゴ>」に並べられる。この籠立ての作業は、原魚の最終チェックをする役割も果たしている。

#### 3-5. 煮熟

籠立てを終えた煮籠は、8～10枚重ねられウインチで釣り上げ、鮮度の良いときは摂氏75～80℃、やや落ちるときは80～85℃の湯をたたえた煮釜の中で煮熟する。当初80℃前後だった湯の温度を98℃まで上げる。100℃にしないのは、沸点まで温度を上げると、釜底より大きな泡が立ち上がり、節が動揺して煮くずれがおきやすくなるからである。煮くずれすると、節の肌が荒れたり身割れが生じる。現在は、コンピュータによって自動的に温度管理が行われている。

煮熟する時間は、亀節で45～60分、本節で60～90分である。長時間煮熟するのは、熱凝固性のタンパク質を完全に凝固させることと、自己消化酵素を失活させるためである。これが不十分だと、焙乾したときに肉のしまりが悪く、味も低下する。タンパク質が十分に凝固されると、筋肉中の水分が拡散しやすくなり、その後のイノシン酸は分解されずに残るので、良く肉のしまった苦味などの癖がない、旨味に富んだ上等なか

つお節が出来上がる。

この時に出る煮汁を煎じたものを「かつお煎汁<イロリ>」といい、かつお節が誕生する以前から貴重な調味料として使われていた。現在では「煎汁<センジ>」や「エキス」と呼ばれている。

### 3-6. 放冷

煮釜から煮籠を取り出し、風通しの良い涼しいところに1時間ほど置き、身を引き締める。この作業を放冷といい、出来上がった節は、なまり節と呼ばれる。なまり節は煮熟しただけのものなので、含有水分も多く、かつお節と違い保存性は良くない。そのため、数時間軽く焙乾をして、保存性を持たせてからチルドで販売しているものが「焙乾なまり節」である。

### 3-7. 骨抜き

水を張った「骨抜き盥<タライ>」と呼ぶ水槽に、煮籠を1枚ずつ籠ごと入れ、骨、皮、ウロコ、皮下脂肪、汚れなどを取り除く。これを「水骨法 <ミズボネホウ>」といい、全国的に主流となっている。

主産地の一つである鹿児島地方では、生切り後に生の状態で、水に浸けずに手のひらの上で骨、皮を除く「陸骨法<オカボネホウ>」で行われている。

水骨法の手順は、

- ① 一本ずつ水面近くに浮かせ、手のひらに軽く乗せる。
- ② 節についている皮をはぎ取る。背節は頭に近いほうを半分から3分の2、腹節および亀節は同3分の1をはぎ取る。
- ③ 皮下脂肪、ウロコ、その他の汚れを取り除く。
- ④ 生切り時に残された太骨類(背節の2本骨・腹節の7枚骨・合断ち骨)を抜き取る。亀節も同様とする。

皮を全部はぎ取らないで残すのは、次の工程の焙乾時に身くずれを起こさないためと、皮にできるシワの状態が「枯れ」具合、つまり乾き具合を判断にする目安となるからである。この骨抜きの作業を行うときに、節を煮籠から離すので、骨抜きの工程を「籠離し<カゴバナシ>」とも呼ぶ。

### 3-8. 水抜き焙乾 … 「一番火」

骨抜きを終えた段階の節は、水分が68%と鮮魚とほぼ分量を含んでいる。これを蒸発させ、腐りにくくするために焙乾を行う。焙乾とは燻すことを何回も繰り返す。最初に行われるのを「一番火」といい、「二番火」以降とは区別して「水抜き焙乾」と言う。

蒸籠<ムシカゴ>とも呼ばれるセイロに節を並べ、焙乾炉または焙乾室の火山<ヒヤマ>の上にかける。その構造は、底の火床<ヒドコ>に一つまたは複数の薪<マキ>を燃やす火山を設け、火山からの煙と熱気がセイロの節にあたるように設計されている。昔ながらの手火山<テビヤマ>と呼ばれる焙乾炉では、1枚のセイロに、通常6尾分の節が皮を上にして置かれる。それを下から薪で燻す。薪にはナラ、クヌギ、サクラなどの堅木が適している。

一番火は、表面の水分を除き、雑菌を殺してネット(表面にできる雑菌の集落)の発生を防ぐのが目的である。85~90℃で約1時間行う。煙が平均して行き渡るように、途中でセイロの上下を入れ替える。

「焙乾<バイカン>」とは、薪等を燃やした火力などによって得られた熱気流を主体に、合わせて煙を利用して乾燥することである。「燻乾<クンカ>」は、煙を主体に熱気流と合わせて乾燥することを言う。煙の中にはたくさんの有機化合物(アルデヒド系、フェノール系、酸類、塩基等)が含まれており、これらの有機化合物が、素材の周囲を包み込んで、外部からの雑菌の進入を妨げて腐敗から守ったり、素材の内奥まで浸透し、殺菌効果をもたらす働きがある。この煙の効果を利用した食品加工法が、「燻製」である。

かつお節の製造の歴史は、長い間日干で行ってきたが、後に日干不良の悪天候時に、わらを燃やして火乾を併用するようになった。かつお節の場合は火熱を利用して乾燥が行なわれてきたので、焙乾の言葉が使われてきた。

### 3-9. 修繕 … 「こすくり」・「そくい」

身が欠けたり、傷がついたまま次の工程に進むと、欠損した部分から身割れがおきたり、欠損部分が拡大する恐れがあるので、それを防ぐために行う。

修繕は焙乾が終わった翌日に行う。方法は、中落ちや頭について残った肉を、煮熟時に一緒に煮ておいた煮熟肉と生肉を、2対1の比率(産地によってはこの比率が違い、また更に裏ごししてから使う所もある)で混ぜ合わせ、すり鉢でよくすり潰してペースト状にする。竹ベラで身割れや欠損部分にすり身を埋め込んで、その上から水で湿らせた和紙を張っておく。

### 3-10. 間歇焙乾

焙乾を繰り返す。一番火は水抜き焙乾のことを指すので、「二番火」より始まり「三番火」「四番火」……と回数に合わせて名前が呼ばれる。亀節で六~八番火・

本節で十～十五番火行われる。基本的な方法は、セイロに節を並べて薪で燻す「一番火」と同じだが、一番火より少し低めの温度で1時間ほど行う。さらに三番・四番…と進むにつれて、徐々に焙乾の温度を低くし、反対に時間を長くする。

1つの焙乾が終わり、次の焙乾に移る間に「あん蒸<アンジョウ>」を行う。あん蒸とは、節の並んだセイロに木のふたをし、寝かせる作業のことである。かつお節をつくるには、内側にある水分を表面のほうに拡散させ、そこから外に出す必要がある。あん蒸なしにいきなり焙乾すると、節の表面だけ堅くなり、水分が中に封じ込められて不均質な節に仕上がってしまう。それを防ぐために間歇的に焙乾し、さらにあん蒸の作業を行う。

焙乾の終わった節の表面は燻煙中の煙成分（タール）に覆われて黒くなり、表面がザラザラとしていることから「荒節<アラブシ>」あるいは「鬼節<オニブシ>」と呼ぶ。

荒節の残存水分は、荒節で出荷するときは20%前後、また、枯節に仕上げるときは25%前後まで低下する。枯節に仕上げるときの残存水分を多くしているのは、後工程でのカビ付け作業のときに、カビが付きやすくするためである。

### 3-11. 削り … 「整形」

荒節を半日～1日よく日にあててから、さらに樽か箱に詰めて2～3日おく。そして表面が湿り気をおびてきたら、「削り」の作業に入る。何回も焙乾を繰り返したために、表面に多量のタール分が付着し、また内部より脂肪分がにじみ出ている。このタールと脂肪を削り取るのが「削り」で、合わせて節の表面の凹凸や屈曲も削ることによって形が整えられる。

削りの工程は、節をきれいな形に整えると伴に、かつお節優良カビが付きやすくすると、タール分に含まれる強い焙乾香を和らげて、かつお節らしい風味とする役目がある。現在は、グラインダーなどの機械によって削られるが、以前は削り専門の職人が、曲がり包丁、背引き、突き出刃などを使い、手作業で行った。削りは、かつお節作りの中でも特に職人の技が試される重要な工程である。そのため、かつて削り専門の職人たちは、かつおが太平洋を北上するのに従って、削りが必要とされる時期に合わせて、自分たちも南から北に生産地を移動し、かつお節の製造に従事していた。削り上げられた節は、「裸節<ハダカブシ>」と呼ば

れる。赤褐色を呈しているので、「赤むき」「赤はぎ」とも呼ばれる。

### 3-12. 日乾・カビつけ

この工程は、25%前後含まれる裸節の水分を、15%前後まで減少させるために行う。また、節の表面につくかつお節優良カビが、節の中の脂肪分を減少させて肉質をよくしたり、節の表面にカビによる密生状態をつくることで、不良カビの発生を防止して、好ましい特有の香味を作りだしている。

作業は日数をかけじっくりと行われる。削りの終わった裸節を1～2日間、戸外で日に当てる。この工程を「日乾」と言う。その後、樽か木箱に節を詰め、しっかりとふたをする。

工場には、カビが発生しやすいように温度25～26℃・湿度84～85%に自動制御されたムロ（室）があり、その部屋に節の入った箱を入れると、夏場は10日間程で節の表面がカビで覆われる。

このカビのことを「一番カビ」と言う。一番カビのついた節を、戸外に広げたムシロ等の上に並べて2日間ほど日に干す。日乾された節は、ブラシを使って一本一本丁寧にカビを払い落とす。次に、風通しのよい日陰に並べ放冷する。

その後再び節を箱に詰め、一番カビと同様にカビ室に入れる。今度は15日前後で一面にカビがつく。これを「二番カビ」と言う。日乾→カビ落とし→放冷の後、再びカビ室に戻す。新たについたカビを「三番カビ」と言う。三番カビ以降は、カビ室に入れることはせず、長く伸びたカビの菌糸等を落とした後は外気中に置いて、カビの生長を待つ。今までと同様に、日乾→カビ落とし→放冷を行い、四・五・六番とカビつけ作業を繰り返す。通常は四番、長くて六番までカビをつける。一番カビから生えるかつお節優良カビは、最後まで同じカビだが、色合いが変わってくる。一番カビでは青っぽいものが、成熟するに従って赤茶色に変わる。尚、複数回カビをつけるが、そのたびに新しいカビをつけるのではなく、一番カビが種菌となって最終番のカビに成熟してくる。

日乾時の注意点は、カビつけが進んだ段階の節は、雨が一滴でも落ちると斑点になって痕が残ってしまうので、天気には常に注意をはらって作業する。カビがつくまでの日数は、カビつけの回数が進むにつれて延びていく。おおよそ一番ごとに1週間ずつ長くなる。尚、現在はかつお節製造に適したかつお節優良カビを

培養し、その胞子を菌液として常に確保しておき、一番カビの工程のときに噴霧して使用する。これにより、他のカビ（毒性を持つものもある）の繁殖を押さえる。三番カビをつけたものを「枯節」・四番カビ以上つけたものを「本枯節」と呼ぶ。本枯節の含有水分は12～15%で、節同士をたたき合わせると、「カーン」と堅い澄んだ音がする。かつお節は、生切りからカビつけ作業まで、4～6ヶ月かけてはじめて製品になる。

#### 4. 焼津のかつお節産業

##### 4-1. 焼津のかつお節産業の歴史

早春、フィリピン東方の海域にいたかつおの群れは、黒潮にのって北上しはじめる。西南諸島の沖合を通り、3～4月に九州、四国の沖合いに達し、伊豆半島の沖にたどり着くのは5～6月の初夏である。かつお節の原魚となるのは、この頃までのものが良く、夏以降の房総半島沖合い以北で捕れたかつおは脂肪が多くて適さない。江戸時代、かつお節の名産地が薩摩、土佐、紀州、伊豆にあったのは、このためである。

焼津のかつお節生産は、明治時代1880年頃から西伊豆の荒節や、千葉県、茨城県、福島県などの荒節を買い入れ、焼津で仕上節に加工して東京などの消費地市場に出荷するようになった。地の利の良さを活かし、資本力の大きい焼津の業者の経営法である。

同時に技術面の高度化にも努め、1890年頃には土佐、薩摩、伊豆などの各地から優れた技術を取り入れて「焼津節」の改良型を完成させた。同時に焼津のかつお漁船も徐々に大型化し、伊豆諸島沖の脂肪の少ないかつおを水揚げできるようになり、遂に1895年の国内勸業博覧会では、かつお節の1、2、3等賞を独占するまでになった。ここで焼津のかつお節は、全国の標準型として統一されたと言われている。

一方1889年の東海道本線開通は、焼津のかつお節産業の発展に力を添えた。各地からの荒節移入が明治時代後半から増加し、大正時代（1912～1926）には、焼津がかつお節の全国的な集散地となり、三陸地方から鹿児島に及ぶ各地から荒節を移入し、さらに焼津の代表的な業者は、台湾、奄美大島、ロサンゼルス近くの漁港などへ進出して荒節を作り、それを焼津に移入して仕上節に加工した。

焼津のかつお節業者の活動は、このようにスケールも大きく、大手かつお節業者は20世紀初めから50～100人規模の従業員を雇用してかつお節を製造した。

さらに経営者自身が製造技術の派遣教師になって全国各地へ出張し、その地で荒節が生産できるようになると、これを焼津に移入して仕上節に加工し、大消費地市場へ出荷した。彼らはかつお節産業における大問屋となり、技術指導者であり、問屋主導型流通システムを築いたパイオニアである。

焼津は、こうして20世紀初めから日本一の産地となったが、かつお節の製造現場は、1960年代の高度成長期にいたるまでは、熟練従業員の技術と労働に依存する手工業的製造を維持していた。個の製造法が近代的工場制に変わったのは、1970年代後半以降のことであり、またその過程は、かつお節生産力が上位企業に集中する過程でもあった。つまり力のある業者が多い焼津、枕崎、山川の三産地にかつお節生産が集中することになる。

##### 4-2. 焼津市のかつお節産業と他産地

表1は かつお節の生産量・輸入量、かつお削り節の生産量、表2は平成20年におけるかつお節、かつお削り節の県別生産量を表している。鹿児島県には枕崎、山川、静岡県には焼津が代表的な産地である。このように、かつお節の国内生産量は、近年4万トン前後で推移している。そして全体の97%は、鹿児島（枕崎、山川）、静岡（焼津）の両県が独占的に生産している。

表1 かつお節の生産量・輸入量、かつお削り節の生産量

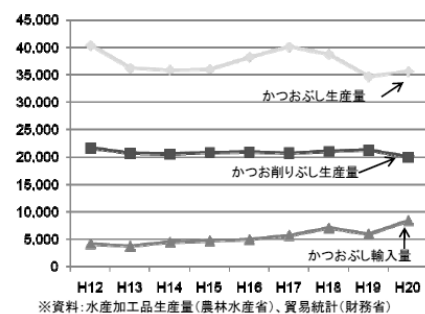


表2 かつお節、かつお削り節の県別生産量（平成20年）

順位	国名	輸入量
1	フィリピン	3.8
2	インドネシア	3.0
3	中国	7

生産されたかつおぶしは、全国の二次加工メーカーに出荷され、削りぶしや風味調味料、めんつゆ等の加工原料として用いられている。

表3 かつお節の国別輸入量（平成20年）

（単位：トン、％）

順位	国名	輸入量	シェア
1	フィリピン	3,845	45.8%
2	インドネシア	3,015	35.9%
3	中国	770	9.2%
	全世界(5)	8,394	100%

※資料：貿易統計（財務省）（ ）内は国・地域数

表3は、かつお節の国別輸入量を示している。現在（平成20年）は、国内生産量の1～2割程度である。

#### 4-3. 現在の焼津の漁業

焼津漁港は特定第3種漁港であり、かつお・マグロを中心とした遠洋漁業基地である焼津地区と、サバ・アジを中心とした沿岸・沖合漁業基地である小川地区、及びその間に位置する新港地区からなっている。焼津魚市場・小川魚市場という2つの卸売市場を擁しており、開設者はそれぞれ焼津漁業協同組合と小川漁業協同組合である。

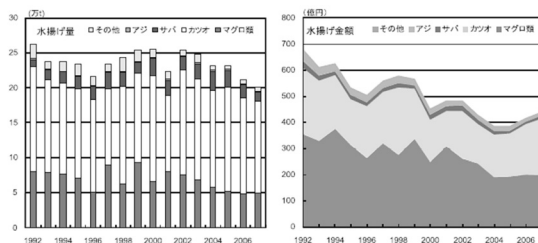


図1 焼津漁港（焼津・小川）における水揚げ動向

焼津漁港における2007年の水揚げ量は銚子に次いで全国2位、水揚げ金額は福岡に次いでこちらも2位であり、全国でもトップクラスの水揚げ量・金額となっている。なお、08年に旧・志太郡大井川町が焼津市に編入合併されたことで、焼津市の漁港には桜エビやシラスの水揚げを中心とする大井川港が加わっているが、ここでは焼津漁港（焼津・小川）のみを対象としている。

焼津漁港における主要魚種別の水揚げ量・金額を図1に示した。水揚げ量のほとんどをマグロ類とかつおが占め、それらにサバ・アジが続いている。総水揚げ量は02年の約25万tをピークに減少傾向にあり、07年

の水揚げ量は約20万tとなっている。併せて水揚げ金額も確認すると、92年の約680億円から、04・05年の約380億円まで減少したが、近年ではかつおの単価上昇が生じ、07年には約440億円となった。

#### 4-4. 焼津の水産加工業

焼津市における水産加工業の代表格はかつお節製造業であり、高知県などからの技術移転による技術・技能の向上に加え、焼津港におけるかつお水揚げ量の増加と共に発展してきた。

また、近海かつおが水揚げされる春先から秋口にかけてかつお節を製造する傍らなまり節や佃煮の製造が、冬場の裏作的な位置づけとして練製品の製造がおこなわれていた。その後、かつお節から他業種へのシフトをおこなう業者が出現したことで、業種毎の専門化が進展した。また、70年代半ばから開始されたかつおたたきの製造規模が拡大していることも注目に値する。その他の業種としては塩サバ製造があり、1960年代中盤に隆盛をみたものの、近年は減少傾向を辿っている。

焼津市の水産加工業は、その幅広い加工業種のラインナップによって、焼津港に水揚げされる漁獲物の受け皿となってきた。かつおを中心としつつも、幅広い魚種・品質の漁獲物を大量に処理し得るといった特質が、焼津港を全国でも有数の水揚げ港にする一要因となり、さらに全国有数の水揚げ港に立地し、かつ大消費地である東京・名古屋と近接しているという好立地も相まって、一大水産加工集積地として成立した。

#### 4-5. 現在の焼津のかつお節産業

主要産地におけるかつお節の生産動向を確認すると、93年までは焼津がトップの地位にあったが、それ以降は枕崎がトップ、04年以降は山川がそれに次ぐ形となり、焼津は全国3位の地位となった。

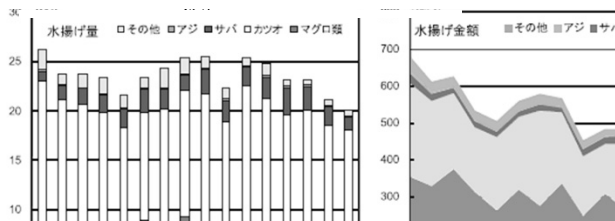
表4に近年の動向を示した。生産量が減少傾向にあることと共に、主要産地の中でも荒節の割合が高いことが確認できる。また、焼津におけるかつお節加工業者の内、生産金額上位30業者の状況を見ると、上位2業者が全体の44%を占め、これに大きく離れて3業者が、それ以降は小規模・零細の約25業者が続くという構図になっている。

08年の実績では、海まきによって水揚げされた冷凍かつおの内、約60%がかつお節向けとなっており、原材料となるのは7kg以下サイズのものである。原材料のほぼ100%が地元港での水揚げ分となっており、枕崎や山川では20～60%という水準であることから、



焼津における地元原料使用率の高さが際立つ。但し、周知のようにかつおの相場は国際化しており、価格乱高下の可能性がある中、安定的な原材料の確保が課題となっている。

表4 主要鯉節産地における生産動向



上位業者における販売規模別の主要取引先状況を表5に示した。最も多いのは大手企業への販売である。ここでの大手企業とは、味の素、東洋水産、ヤマキ、にんべん、マルトモ等を指し、花かつおや調味料を最終形態とする加工原料としての販売となっている。

これら業者は大手企業の協力工場と位置づけられており、取引先には棲み分けがなされている。量販店との取引を主とする3社は規模こそ小さいものの、荒節の他、削り節や仕上節の生産も手がけ、削り節を中心に量販店との固定的な取引をおこなっている。

問屋を主要取引先とする2社は荒節の生産に特化しており、東京や大阪のそば店等を最終需要先として、問屋を介した取引をおこなう。自社販売は荒節や削り節を自社店舗で販売する形態を中心とする。6社中3社が削り節の販売もおこなっている他、調味料・だしへの加工までおこなった上での販売、贈答用としての販売などもある。最後の地域内業者とは荒節の他、だしや調味料の製造販売を手がけている地元企業を指す。

表5 かつお節製造業者における販売規模別主要取引先

主要取引先	販売規模					合計
	～1億円	1～3億円	3～5億円	5～10億円	10～30億円	
大手企業	—	3	2	1	2	8
量販店	3	—	—	—	—	3
問屋	1	1	—	—	—	2
自社販売	1	3	1	1	—	6
地域内業者	1	—	1	—	—	2
合計	6	7	4	2	2	21

資料：焼津鯉節水産加工業協同組合資料、聞き取り調査より作成。

このように、独自にかつお節・削り節等の販売をおこなっている業者も一定程度存在するものの、大手企業や地域内業者の高次加工を念頭に置いた、原材料としての販売の比重が高い。

また、量販店への販売を含めた現在のような取引体

制においては、価格の川下規定が働き、価格向上はもとより、先述したようなかつお価格の乱高下の可能性の高まりといった条件への対応が困難な状況にある。

### 5. 現在の取り組みと展望

焼津の鯉節産業は地域分業体制で構築された。地域分業体制とは、鯉節の生産工程ごとに特化し独立する企業が、生産の元請会社、下請、孫請というようなピラミッド組織の連携を構成し、その地域が一つのかつお節工場のように機能する姿を表している。

しかしながら成熟期を迎えた鯉節産業は、国内マーケットが年々減少、企業間競争がますます激化、価格競争やデフレーションの進行、安価な海外商品などの問題に直面し、低価格化が余儀なくされている。

下請（孫請）取引は、元請会社との価格交渉では、製品価値ではなく、労働価値しか認められない。製品価値とは、商品が持つベネフィットに相当する価値であり、商品開発努力によって付加価値を高め、販売単価を引き上げることができる。一方労働価値とは、既に商品開発は完了しており、その商品を効率的に生産する価値である。従ってローコストで生産できるほど価値が高まる。言い換えれば企業が努力するほど販売単価は低くなる。

焼津のかつお節産業は、先人、先達の努力によって原料かつおの一大水揚げ基地とともに、かつお節・削り節といった製品の一大生産地、集散地として全国をリードしてきた。このパイオニア精神を活かして、低価格化を乗り越える努力を行っている。

焼津のかつお節加工業における近年の取り組みとしては以下のようなものもある。ひとつはかつお節の製造技術に関する動きである。1983年に発足した「焼津かつお節伝統技術研鑽会」では、古くから伝わる製造技術を保存・伝承するため、熟練工による若手への技術指導がおこなわれている。また、2007年には青年会による独自の講習会、「焼津かつお節道場」も開始されており、かつお節の製造技術に関する取り組みが進んでいる。

次に地域団体商標への登録が挙げられる。2006年12月に「焼津かつお節」の商標が登録され、地域ブランド確立に向けた取り組みが進められている。「焼津かつお節」とは、焼津市で生処理・煮熟・煤乾製造した仕上節・荒仕上節・荒節の内、ブランド認定基準を満たしたものであり、ブランド品審査会における検査を

クリアしたものが認定される。

また「焼津かつお節」を原料とした削り節・粉末調味料・液体調味料・その他派生商品の表示にもブランドマークを用いることができるとされている。焼津かつお節水産加工業協同組合においては、今後ブランドかつお節の販売量を増加させる意向を有しており、現在の調味料等の原材料としてのかつお節生産に傾斜した状況から、より品質を重視しつつ最終製品あるいは原材料としての地位を高め、焼津の存在を前面に押し出していく狙いが見て取れる。

これらの取り組みを通じて、国内マーケットではブランドを築き、グローバル化による価格競争に備えた新たな産業形成に努力している。

## おわりに

焼津のかつお節産業は、グローバル化の進展、価格競争の激化、人口減少によるマーケット縮小によって、衰退傾向にある。

焼津が歴史的にかつお節産業の一大生産拠点となった背景には、問屋業のノウハウを持ち、原材料の調達能力、完成品の物流能力が他の産地よりも優れていたこと、日本の高度経済成長のマーケット拡大期において、大量生産への積極的な設備投資に挑戦したことなどが挙げられる。

これらで培った技術を新たな商品開発へ応用し、積極的な産業開発に挑戦する時期にあると考えられよう。世界的に評価される日本の技術は、例えば亜鉛メッキ鋼板は有名であろう。このメッキ技術は、有田焼の技法を応用したもので、他国では真似のできない技術である。よって日本の亜鉛メッキ鋼板は高値で安定した需要を持っている。同じようにカビを応用したかつお節生産技法を使って、新たな商品開発に挑戦することに期待できよう。

## 【引用文献】

1. 若林良和著『かつおと日本社会』筑波書房，2009年4月
2. 和田俊著『かつお節』幸書房，2006年6月
3. 若林良和著『かつおの産業と文化』成山堂書店，2007年11月
4. 平田良著「焼津かつお節産業の課題」，静岡精華短期大学紀要，第5号，1997年1月，pp.1-14
5. 川口 博康，「海外のかつお節産業」，

[http://www.npo-tebiyama.org/pdf/oversea\\_k.pdf#search='%E6%B5%B7%E5%A4%96%E3%81%AE%E9%B0%B9%E7%AF%80%E7%94%A3%E6%A5%AD'](http://www.npo-tebiyama.org/pdf/oversea_k.pdf#search='%E6%B5%B7%E5%A4%96%E3%81%AE%E9%B0%B9%E7%AF%80%E7%94%A3%E6%A5%AD')

<http://www.mpt.go.jp/policyreports/japanese/papers/h12/index.html>，NPO法人手火山，2013年2月6日アクセス

6. 「焼津とかつお節」，  
[http://www.yaizukatuobushi.jp/blog/?page\\_id=776](http://www.yaizukatuobushi.jp/blog/?page_id=776)，焼津かつお節水産加工業協同組合，2013年2月6日アクセス
7. 「焼津市のすがた」，  
<http://www.city.yaizu.lg.jp/yaizu-info/yaizu-city.html>，焼津市，2013年2月6日アクセス
8. 「かつお節博物館」，  
<http://www.daiyan.jp/index.html>，2013年2月6日アクセス
9. にんべん「かつお節の歴史」，  
<http://www.daiyan.jp/history.html>，2013年2月6日アクセス
10. 中原尚知「静岡県焼津市における水産加工業の現状と課題」，『構造再編下の水産加工業の現状と課題』，東京水産振興会，2011年5月
11. 「かつお削り節，かつお節の流通状況」  
[http://www.cao.go.jp/consumer/history/01/kabusoshiki/syokuhinhyouji/doc/003\\_100721\\_shiryoku1-5.pdf#search='%E9%B0%B9%E7%AF%80%E3%81%AE%E6%B5%81%E9%80%9A%E7%8A%B6%E6%B3%81'](http://www.cao.go.jp/consumer/history/01/kabusoshiki/syokuhinhyouji/doc/003_100721_shiryoku1-5.pdf#search='%E9%B0%B9%E7%AF%80%E3%81%AE%E6%B5%81%E9%80%9A%E7%8A%B6%E6%B3%81')，消費者庁食品表示課（2010年7月），2013年2月8日アクセス

# 「かいつぶり」について

向山 守

On "Dabchick"

Mamoru MUKAIYAMA

"Il est encore plus facile de juger de l'esprit d'un homme par ses questions que par ses réponses." Voltaire.

## 1. はじめに

『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』の出版も社会現象として大きく取り上げられた村上春樹は、コンスタントに短篇を発表する作家でもある。加藤典洋氏による『村上春樹の短編を英語で読む 1979～2011』（以下、『村上上の短編』）によれば、12編の長編小説を軸に、実に80編もの短編小説がそれを取り巻くように発表されている。<sup>(註1)</sup>

その短編群は、初期23編、前期29編、中期12編、後期が16編と分けられるが、「初期作品の日本国内での評価は、(中略)あまり芳しいものではない」<sup>(註2)</sup> 初期の作品群に関する評価の例として、加藤は「未成熟、生硬、挑戦的、試行錯誤的」という不安定要素があげられていることを紹介する。そして、その理由を「若さ」のせいにする批評にあきたらない加藤は、なぜこの作品群が「生硬で、挑発的で、試行錯誤的」なのかをもう一步踏み込んで問い、初期作品群からは「中国行きのスロウ・ボート」「貧乏な叔母さんの話」「ニューヨーク炭鉱の悲劇」の3編を取り上げ、スリリングな批評を展開する。

この小論では初期作品の中ではあまり論じられることのない「かいつぶり」を取り上げ、村上作品の一つの読み方を提示したい。<sup>(註3)</sup>

## 2. 「かいつぶり」について

「かいつぶり」は1983年に出版された『カンガルー日和』の中の「きわめて短い短篇小説」の一つである。上で述べたように、「かいつぶり」はあまり論じられ

ることのない作品であるが、作者自身の中では思い入れのある作品ではないかと筆者には思われる。その根拠としては、1991年に出された『村上春樹全作品集 1979～1989⑤ 短篇集Ⅱ』に収録される際に大幅に書き直しがなされており、さらに、2006年に出版された『はじめての文学 村上春樹』という年少向けの自選アンソロジーに入れられていることがあげられる。また、海外の読者を対象として同じ2006年に出版された *Blind Willow, Sleeping Woman* にも収録され、もちろん、2009年に出版されたその日本語版である『めくらやなぎと眠る女』にも収録されている。

1983年のオリジナル版と1991年の改訂版では話の筋自体は同じであるが、細部に手を加えることによって、短篇ではあるが重厚感が増している。冒頭の部分を比べてみよう。

### 1983年オリジナル版

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がまっすぐに続いていた。天井がいやに高いせいか、廊下は干上がった排水溝みたいに見えた。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたっぶりとはこりをかぶって黒ずみ、その光はこまかい網でもくぐり抜けてきたように不均一だった。おまけに三本に一本は電球が切れてしまっている。自分の手のひらを眺めるのも一苦労という有様だ。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

#### 1991年改訂版

コンクリート造りの狭い階段を下りると、その先には長い廊下がどこまでもまっすぐに続いていた。とても長い廊下だった。天井がいやに高いせいで、それは廊下というよりは干上がった排水溝みたいに見えた。そこには装飾と呼べるようなものは何ひとつなかった。きわめて即物的な廊下だった。ところどころにとりつけられた蛍光灯はたっぷりとほこりをかぶって黒ずみ、その光はいろんなひどい目にあわされた末にやっとここまで辿り着いたのだとでもいわんばかりに不均一で、疲弊していた。おまけに三本に一本は電球がきれてしまっている。自分の手のひらさえきちんとは見えない。あたりにはもの音ひとつない。運動靴のゴム底がコンクリートを踏む奇妙に平板な音だけが薄暗い廊下に響いていた。

改訂版は、オリジナル版と比べると、廊下の「長さ」と「無味乾燥感」が増し、書き加えられた蛍光灯の描写によって「疲弊感」がにじみだし、主人公の「孤独感」「閉塞感」「絶望感」が強調されることになる。

書き直しについて、特筆すべき特徴としてもうひとつあげられるのは、途中で出てくる「男」のことは遣いである。以下、オリジナル版と改訂版をいくつか比べてみる。

1983年オリジナル版

「ごめんよ、風呂に入っていたものだから」

1991年改訂版

「すみませんね、ちょうど風呂に入っていたものですから」

1983年オリジナル版

「俺は何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみるよ」

1991年改訂版

「私は新規採用については何も聞いてないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いでみましょう」

1983年オリジナル版

「だから、そのためには合言葉がいるんだよ」

1991年改訂版

「いや、だからそうするには合言葉が必要なんです

よ」

一読すればわかるように、オリジナル版の「男」よりも改訂版の「男」の方が、ずっと丁寧で紳士的である。この書き換えについては、「おわりに」で取り上げたいと思う。<sup>(注4)</sup>

### 3. 「かいつぶり」の世界へ

「かいつぶり」の話の進み方にはまったく難解な所はない。ただ、はじめに注意しておきたいのは、前半が8ページ強あるが、後半はたった11行であるというアンバランスな構造を持っていることである。まずは前半の物語の筋をおっていく。

主人公は「僕」である。上述したコンクリート造りの長い廊下を下りてゆく場面からはじまる。暗くにもない廊下が延々と続く。どのくらい歩いたのかという「感覚さえなくなってしまう」ほど歩いていくとT字路に突き当たる。僕は新しい職を探してこの長い廊下を歩いてきたが、案内の葉書には「廊下をまっすぐ進んでください。つきあたりにドアがあります」としか書かれていない。途方に暮れた僕は煙草を一本吸い、今までの自分を回想する。「僕は貧乏な生活には十分うんざりしていた。月賦の支払いにも、別れた妻への離婚手当にも、狭いアパートにも、浴室のゴキブリにも、ラッシュ・アワーの地下鉄にも、そんな何もかもにうんざりしていた。」しかし、新しい仕事は「楽しい、給料は目玉が飛び出るほど良」く、「年に二回のボーナス、夏の長期休暇」がある。ポケットから十円玉を出して指ではじき、表がでたのでT字路を右に曲がり、「給料のことを考え、エア・コンディショナーのきいた気持ちの良いオフィスのことを考え」ながら、どんどん進んでいく。

すると、「行く手にドアが見えて」きて、ようやくノックをすることになるが、なかなか返事がない。三度目のノックをしようとする、ドアが音もなく開き、一人の「男」が姿を現す。

「男は二十代の半ばというあたりで、身長は僕より五センチばかり低い。洗ったばかりの髪から水滴をしたたらせ、裸の体をえび茶色のバスローブに包んでいた。足は不自然なほど白く、靴のサイズは22というあたり」である。濡れた髪に驚いている僕に男は「すみませんね、ちょうど風呂に入っていたものですから。……規則なんです。僕は昼飯のあとには必ず風呂に入

らなくちゃいけないんです」と言う。要件を聞かれた僕は、「上着のポケットから例の葉書を取り出し、男に手渡し」、「五分ほど遅刻しちゃったみたいなんだけど」と言い訳をする。

男は「新規採用については何も聞いていないんだけど、とにかくまあ上の人に取り次いで」と言い、僕に「合言葉」を尋ねる。合言葉についてまったく思い当たりのない僕は、なにかの間違いではないかと、合言葉なしでも取り次いでもらえるようかけあうが、男はガンとして譲らない。

しかし、押し問答が続いた後、男は折れて、僕にヒントを出してくれる。「いいですか、とても簡単なことばで、水に関係があります。手のひらに入るけれど、食べることはできない。」僕が「最初のことばは？」と聞くと、「か」と彼が言う。僕が文字数をたずねると、「五文字」と彼は言う。「僕はそれについてじっと考え」て、「かいつぶり」と言う。

男は「かいつぶりは食えるでしょう」と反論し、僕は「かいつぶりはおそろしく不味いから犬だって食べない」と再反論する。男は「あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんですよ」と引導を渡すが、僕は合言葉は「かいつぶり」であるとあくまで主張し、「かいつぶり以外に水に関係があって、手のひらに入るけど食べられない五文字のことばなんてひとつもないよ」と強弁する。合言葉を口にすることのできない男はしぶしぶ「しかたないな。……一応取り次いでみますよ。まあ無理だとはおもいますがねえ」と言う。ここまでが物語の前半で、一行あいて後半が始まる。

後半は極めて短いので全文引用する。

手のりかいつぶりはビロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた。右下の奥歯がしくしくと痛んだ。また歯医者か、と彼は思う。もううんざりだ。世界はろくでもないことでみちている。歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンディショナーの故障……。彼は皮ばりのアームチェアの背もたれに頭をもたせかけ、目を閉じて、死について思いめぐらしてみた。死は海の底のように静かで、五月の薔薇のように甘美だった。かいつぶりはこのところよく死について考えた。自分が死んで永遠に眠っている光景を頭の中に描くのだ。

手のりかいつぶりここに眠る。墓石にはそう刻ん

であった。

その時インタフォンのブザーが鳴った。

「なんだ？」と手のりかいつぶりは機械に向けて不機嫌な声で怒鳴った。

「お客です」と門番の声がした。「今日からここで仕事をするんだそうです。合言葉もいきました」

手のりかいつぶりは眉をしかめて腕時計を眺めた。「十五分の遅刻」

前半の数ページにわたる話の展開と、後半が十数行足らずで終わってしまうというアンバランスさのために、読み手はまるでキツネにつままれたような読後感を味わうことになる。

## 4. 噴出する疑問

### 4. 1 疑問群

「かいつぶり」の筋は、単純に要約してしまえば、「僕」がうんざりしている日常生活を捨て、新しい仕事を得るために、地下の長い廊下を歩き、門番をしている「男」の所へ到着するが、「合言葉」を知らないために口論になり、一応相手を説き伏せる所までが前半で、アンニュイな「手のりかいつぶり」が、門番からの報告を受け、「十五分の遅刻」をした「お客」を受け入れるのが後半である。身もふたもないようだが、たったこれだけの話である。

しかし、こんな単純な展開の途中で、いろいろな疑問がわいてくる。そして、その疑問は作品の中で解決されることはない。

まず思い浮かぶ疑問は、僕がつこうとしている仕事についてだ。僕が今ついている仕事は、「ラッシュ・アワーの地下鉄」にうんざりしていることから、疲弊した平均的サラリーマンだと考えてよいだろう。ところがつこうとしているのは「うまい仕事」だ。上述したように「楽だし、給料は目玉が飛び出るほど良」くて、「年に二回のボーナス、夏の長期休暇」つきである。ドアの所にいた男はなぜか「昼飯のあとには必ず風呂に入らな」ければならない。彼の仕事は「ドアを開けて、上の人に取り次ぐってということだけ」で、取り次ぐには「合言葉」が必要である。さらには、「上の人がどんな人か」男は「知らないし、会ったことも」ない。「合言葉をど忘れした」のを「気の毒に思って一人取り次いだだけで」前任者は「クビに」なってしまった。これは一体どんな仕事なのだろうか。

次は合言葉についての疑問である。男は僕に、「とても簡単なことばで、水に関係があります。手のひらに入るけれど、食べることはでき」ず、「か」ではじまる五文字のことば、というヒントを出す。僕は「反射的に」「かいつぶり」という答えを捻り出す。「かいつぶり」が合言葉だと言われて、膝を叩いて「そうだったのか！」と納得する読み手はいないであろう。そしてもちろん、男もその答えには納得しない。ここにおいて読み手は、合言葉が「かいつぶり」だと言い張る主人公の僕と、それを論破しようとする男とでは、男の方が圧倒的に有利であると思う。しかし、この男は結局説得されて、僕を上の者に取り次ぐことになるのだが、そのやりとりが非常にもどかしい。

合言葉が「かいつぶり」であることに対する男の第一の反論は「だってかいつぶりは食べるでしょう」というものだ。第二の反論は、「それに手のひらには入らないよ」である。

この二つの反論に対して、僕はいっぺんに「手のりかいつぶりはおそろしく不味いから犬だって食べない」と答える。これは男の反論に対する適切な答えになっていないのではないかと、という疑問が持ち上がるが、男はこれに対して、「ねえねえ、ちょっと待ってくださいよ。……あなたが何と言おうと、だいいち合言葉はかいつぶりじゃないんですよ。理屈はともかく違うものは違うんです」と言うが、これでは男が自分には反論する能力がないことを露呈してしまっている。

こんな男に、かいつぶりはすべての条件を満たしているのだから合言葉だと僕は断言するが、男は断固否定する。そして、僕が合言葉は「何だい？」と聞くと、男は「一瞬絶句し」て、「それは言えない」と答える。僕はそれに対し「そんなものは存在しないからさ」とたたみかけ、男は「でもちゃんとあるんですよ、ちゃんと」と「泣きそうな声で言う」。

ここでもまた、合言葉は何か、という疑問が以前より強くわき上がってくる。しかし、その疑問の印象を薄めるかのように、男は「手のりかいつぶりを食べるのが好きな犬がどこかにいるかもしれないでしょうが」と、的外れな反論を試みる。的外れな反論には、「手のりかいつぶりが好きな犬なんて見たこともない」という的外れな答えが用意されている。議論はほとんどずれていき、男が「そんなに不味いんですか？」と聞けば、「それはもうおそろしく不味い」と僕。「あんたは食べたことがある？」という男に、「ないよ。そん

な不味いものどうして僕がわざわざ食べなくちゃいけないんだろう？」と僕。ここで男は「一応取り次いでみますよ。まあ無理だとは思いますがねえ」と折れ、押し問答が終わる。合言葉は何なのか。合言葉を言っていないのに取り次いでしまって、男は大丈夫なのか、という疑問が宙づりのまま残される。

後半の第一文は「手のりかいつぶりはピロードの布で眼鏡のレンズを拭き、もう一度ため息をついた」で始まるが、ここでも読み手は「手のりかいつぶりって、何だ」、あるいは、「手のりかいつぶりって、誰だ」という疑問にぶち当たる。「手のりかいつぶり」ということばは前半に出てきていたが、それはあくまで「合言葉」としてである。しかしここでは、どうやら「人」のようである。しかもこれは普通の名前ではない。源氏名なのか、それとも、コードネームなのか。それに、どうしてこの「手のりかいつぶり」はアンニュイなのだろうか。「世界はろくでもないことのみちている」といっても、その例としてあがっているのは、「歯医者、確定申告、車の月賦、エア・コンディショナーの故障」くらいだ。「死について思いめぐら」すほどではないのではないかと。

すると、門番からのインタフォンで「お客です……今日からここで仕事をするんだそうです。合言葉もいきました」という報告がある。ここで読者は「さっき、合言葉は『かいつぶり』ではない、と言っていたではないか」という最大の疑問にぶちあたることになる。

疑問を整理してみよう。前半では①僕がつこうとしている仕事は何か、②合言葉は何か、という疑問が生じ、後半では、③「手のりかいつぶり」とは何か、あるいは、誰か、④「手のりかいつぶり」はなぜこんなにもアンニュイなのか、⑤僕は合言葉を言ったのか、という疑問が矢継ぎ早に生じてくる。

#### 4. 2 答を探して

前節で生じた五つの疑問について、暫定的な答えを考えてみよう。

まず、①僕がつこうとしている仕事は何か、であるが、恐らくこれには確定的な「正解」はない。いろいろな条件から考えると、普通の仕事ではない、ということだ。つまり、僕が今ついている仕事（平均的サラリーマンだと考えられる）とは、違ったタイプの仕事であれば、どんな仕事でもよい、ということだ。「昼食後の風呂」や「合言葉の要請」はそれを象徴的にあ

らわしている、と考えられる。

次に、②合言葉は何か、であるが、これも恐らく「正解」はない。というよりむしろ、「正解がない」ということが正解かもしれない。

私たちは日ごろ何気なく「ことば」をつかっている。そして、「ことば」自体にはあまり意識を向けず、「ことば」は確固とした根拠に基づいたゆるぎないものだと思っている。さらに、その「ことば」によってお互いを理解しあっていると感じている。しかし、「ことば」とは、この「合言葉当てゲーム」が示すように、一皮むけば、非常にあいまいで、解釈によってはどうにでもなるものだ。そんなあいまいで、もろい「ことば」によってしか、人は理解しあえない。そんな人間の不条理を、滑稽な形で提示している。

③「手のりかいつぶり」とは何か、あるいは、誰か、であるが、ここではっきりしていることは、この作品の中では、明らかに「人」である、ということだ。その証拠に「レンズを拭」いたり、「ため息をついた」りするし、「腕時計を眺めた」りもする。では、なぜ、「手のりかいつぶり」などと呼ばれているのだろうか。これは①とも関係していることで、本名を名乗ることができない、あるいは、名乗るとまずいことになる仕事についているということであらわし、「僕」のいる世界との違いをはっきりとさせる役割をはたしている。

④「手のりかいつぶり」はなぜこんなにもアンニュイなのか、という疑問は、この作品をどう読み解くかによって、その答えが変わってくる可変的なものだろう。

そして、最後の⑤僕は合言葉を言ったのか、であるが、これをどうとるかで、この作品は、まったく違う様相をみせることになると思うので、次の節で詳しく考えてみる。

#### 4. 3 僕は合言葉を言ったのか

「僕は合言葉を言ったのか」という疑問に対する答えは、「はい」か「いいえ」のどちらかだ。

まずは、合言葉を「言った」場合を考えてみるが、もしこれが本当ならば、「かいつぶり」が合言葉であったことになる。しかしもし「かいつぶり」が合言葉であるなら、そもそもこの物語は成立しない。その場合には、男は合言葉を口にした僕をすんなり上の人に取り次ぐことになり、この物語の半分以上が失われてしまうことになる。それにすでに示したように、合言葉

の条件にあてはまることばは「かいつぶり」である可能性は少ないであろう。<sup>(註5)</sup>

次に、合言葉を「言わなかった」場合を考える。この場合に一番問題になるのは、後半部で門番が「合言葉も言いました」と述べている事である。前半部では、あれほど執拗に、合言葉が「かいつぶり」でないと主張していた男が、なぜ合言葉を言ったと報告するのだろうか。

講義でこの件について学生からの意見を求めると、この男は人事部の社員で、僕の入社に対する意志の強さを試しているのだという答えが多い。<sup>(註6)</sup> つまり、そもそも合言葉などないのだが、合言葉をあてるという問題を出して、のらりくらりとかわしながら、新入社員の熱意を試す試験官だというのである。なるほど、当世風の意見であるが、そもそもこの話は1983年に発表されているのであり、これは現代にひきつけすぎた解釈のように思える。またこれでは、後半部の「手のりかいつぶり」が突然読み手の前にあらわれ、世をはかなんでいる様子との関連性がみられない。

ここまでは、僕は合言葉を言ったのか、という疑問について考えてきたが、「言った」と考えても、「言わなかった」と考えても、どちらもしっかりと来ない。ということは、この「僕は合言葉を言ったのか」という疑問自体が、この物語を解明することに対してあまり有効な問いでない可能性を示唆している。さらにそれはまた、今までとは違ったアプローチをしなければならぬことも意味している。

## 5. わからなさの先へ

### 5. 1 枠組み

人は何かをする際には、なんらかの枠組みに従っている。例えば、「外食」をする際には、「注文をする→料理が来る→食べる→勘定を払う」といった「外食の枠組み」を持っている。「風呂」に入る場合は、「服を脱ぐ→体を洗う→湯ぶねにつかる→体をふく→下着を身につける」といった具合で、滞りなく「風呂」に入ることができる。「外食」の場面で、「風呂」の枠組みを使ったら大変なことになる。

読書にも同様な枠組みがある。例えば、たいていの場合、「主人公がいる」とか、「物語は時間的順序に従って進む」とか、いったものだ。

さて、前節でみたように、「かいつぶり」での一番の矛盾点は、前半では合言葉は「かいつぶり」ではな

いと主張しているのに、後半では「合言葉」をいったと報告する男の振る舞いである。私たちがこの男の振る舞いに「矛盾」を感じるのは、前半の登場人物と後半の登場人物が同一人物だと思っているからだ、そして、そう思っているのは「同じ行為をする人は同一人物である」という枠組みに従っているからなのだが、前半の男と後半の男は本当に同一人物なのだろうか。別の人物である可能性はないのだろうか。また、もし別の人物であるならば、上述の矛盾点は解消されることになる。そして、それは物語の解釈にどのような影響をあたえるのだろうか。

## 5. 2 枠組みの破壊

前半と後半の男が同一人物だと考えると、物語の流れは以下ようになる。

前半 僕と男の合言葉に関する口論 (約10分)  
↓  
後半 今を憂う手のりかいつぶりへの  
男からの報告

合言葉をめぐる口論がなぜ10分であると考えられるかという、前半での僕と男の会話で、「五分ほど遅刻しちゃったみたいなんだけど」という言い訳の台詞があり、後半の最後の手のりかいつぶりの台詞が「十五分の遅刻」となっているからである。つまり、この場合、前半と後半の切れ目は、前半の僕目線と後半の手のりかいつぶり目線を区別する視点の転換をあらわし、時間は連続していることになる。そして、登場人物は、主人公の「僕」「男」「手のりかいつぶり」の三人ということになる。もちろん、合言葉に関する男の矛盾は解決されない。

さて、それでは前半と後半が別の男だとすると、物語の流れはどうか変わるのであろうか。

前半 僕と男の合言葉に関する口論  
(時間的・空間的断絶)  
後半 今を憂う手のりかいつぶりへの  
男からの報告

テキストにするとほんの1センチほどの改行スペースが、計り知れない時間と空間の断絶をあらわす可能性を秘めることになる。もしかすると、前半の長さが8

ページで、後半が11行であるという不均衡もこの時間的・空間的断絶をあらわしているのかもしれないさえ思えてくる。

それでは、前半と後半の男が同一人物でないという可能性を示唆する証拠はあるのだろうか。答えは「ある」である。テキストを細かく読めばわかるように、後半で、インタフォン越しに報告する男は、はっきりと「門番」と書かれているが、前半で合言葉は「かいつぶり」ではないと主張する登場人物は、「男」あるいは「彼」と書かれているだけで、「門番」と言及されることはない。これは作者によって周到に計算されていると筆者には思える。

もしこれが正しいならば、前半で登場するのは、主人公である「僕」とドアのところで出迎えてくれた「男」の二人で、後半で出てくるのは、インタフォン越しに報告する「門番」とその報告をうける「手のりかいつぶり」の二人で、合計四人となる。しかし、前半と後半の「つなぎ役」であった男が別人であるならば、前半と後半をつなぐものがなにもなくなり、作品としての統一性がまったくなくなってしまう。

それでは、前半と後半の「つなぎ役」は、いったいどうなるのか。もう残されている登場人物は、「僕」と「手のりかいつぶり」しかいない。「男」と「門番」が別人であるならば、「僕」と「手のりかいつぶり」を同一人物として、前半と後半をつなげるしかない。物語の中に、「僕」と「手のりかいつぶり」を結びつける手掛かりはなにか。前半において、「僕」は「何もかにもうんざり」していた。後半で「手のりかいつぶり」も「うんざり」している。この厭世観は「僕」と「手のりかいつぶり」に共通している。前半と後半は、時間的・空間的につながっているという「物語の枠組み」を壊し、「時間的・空間的断絶」があると考えれば、「僕」が数年後、なんらかの理由で「手のりかいつぶり」になったと考えることも可能である。そう考えれば、「僕」と「手のりかいつぶり」に共通する「厭世観」もすんなり説明がつく。

これをサポートするような手掛かりがテキストに一つ埋め込まれている。前半で「僕」は世の中に「うんざり」しながらも、淡い希望を抱く。その一つが、「エア・コンディショナーのきいた気持の良いオフィス」である。後半で「手のりかいつぶり」がうんざりしているものの中に「エア・コンディショナーの故障」をあげているのは注目に値する。



うんざりする世の中に見切りをつけて、新しい世界への淡い期待を抱きながら、その世界に入った「僕」はなんらかの理由で（もしかしたら、その世界で出世して、管理職についたのかもしれない）「手のりかいつぶり」として生きる。しかし、期待して入った世界もある程度過ぎしてみれば、うんざりすることで充ちている。「手のりかいつぶり」は永遠の安住地である「死について思いめぐら」す。なんとも気の滅入るような負の連鎖である。

この解釈をサポートする別の手がかりもある。それは、オリジナル版につけられた佐々木マキさんの絵である。さし絵が作品についての解釈を明確にあらわしているとは思わないが、まったく無関係ということも無いであろう。その絵の上の方には左上から右下の方へ丸い玉が流星のように尾を引いている様子が描かれ、そのまっすぐな軌道を中心にして四つの球が回転している。絵の下半分は、はしごのついたプールのようなところに水がはられていて、その水面はゆらゆらと波打ってきらめいている。そのプールの近くに佇んでいるのは（あるいは、腕と歩幅の具合からするとプールに近づきつつあるようにも見える）、全身を（もちろん、顔も）包帯でグルグル巻きにされたミイラ男なのである。そして、ミイラ男には黒々とした影が伸びている。なぜミイラ男なのか。もちろん、グルグル巻きにされた息苦しそうなのが、「僕」と「手のりかいつぶり」のうんざり感につながっていると思うが、さらにこれは「僕」がうんざりした世界を後にして、新しい世界を求めたが、そこでもまた、同じようにうんざりした気持ちで生きていかななくてはならない、つまり、「ミイラ取りがミイラになる」の変形版であることを、ほのめかしているように思える。<sup>(注7)</sup>

## 6. おわりに

村上春樹の作品は、短編でも読みごたえがある。「かいつぶり」も小品であるが、一筋縄ではいかない。前半と後半の矛盾を解消するために、「粹組み」を変えさせる力を持っている。そして、この「粹組み」を変えることによって、読み手は新しい世界を垣間見ることができる。

最後に、上ではふれられなかった工夫などについて述べてみたい。

まずは、「かいつぶり」というタイトルが非常にうまい事である。よくわからないが、なんとなくどこか

で耳にしたことがあることばだ。ちょっと調べれば、水鳥で潜水して獲物をとる習性があることがわかる。さて、この特徴はそのまま「僕」にあてはまるのではないだろうか。長い廊下を降りて、新しい仕事を求めていくのだから。さらに、前半にでてきた「男」は「水滴をしたたらせ」「えび茶色のバスローブ」で身をつつみ、足のサイズが極端に小さい。かいつぶりは水鳥であるから水滴が滴るであろうし、えび茶色はなんともかいつぶりの頬のあたりに生じる特徴的な色であり、ほとんど歩くことはないで足は退化している。まさに、男は「かいつぶりの世界」を体現している人間なのだ。そして、この「下降」は神話に見られる「冥府下り」であると考えられる。

ここで2.で触れたオリジナル版と改訂版に見られる男のことば遣いの変化について考えてみる。僕の「下降」を「冥府下り」、つまり、異界への侵入ととらえれば、この男は異界の門番ということになる。オリジナル版の男のことば遣いは、僕の日常的な世界と異界の差を際立たせる話し方だ。ところが、改訂版では、むしろその差を感じさせないような書き換えがなされている。前者では、異界は異界として表現されているが、後者では、異界とこちらの世界が地続きであるような、つまり、異界はこちらの世界のごく身近に、それと気づかれぬ様相で存在しているように書かれている。これは、異界が異界として存在した80年代と、異界とこちらの世界があいまいになってきている90年代の時代認識が反映されているように思える。

また、「僕」が「手のりかいつぶり」へと変化するさまは、オウィディウスの代表される「変身譚（メタモルフォーシズ）」の流れをくんでいるとも考えられる。

次に、「手のりかいつぶり」の突然の出現についてである。これはかなり唐突なので、不自然に感じるかもしれないが、私は旧約聖書の世界創世の場面とダブってしまう。神が「光よ、あれ」と言うと、光ができた。つまり、ことばには何かを生み出す力があるのだ。「僕」は切羽詰まって、「かいつぶり」と口にする。そして、作中に唐突に「手のりかいつぶり」が出現する。ただし、この場合は、自分で口にしたことに自分で縛られているという点で、ひねりが効いている。

最後に、なんともいってもこの作品の持つ特徴は、疑問が物語を読み進めていく上での原動力になっており、疑問に対する答えを真摯に求めることによって、新し

い地平を切り拓くという体験ができることである。そういう意味では、読み手自身も変化するメタな物語である。

読み手とは、たいてい作品に「答え」を求めてしまうものだが、そして、その「答え」に感銘を受けて作品を評価しがちである。しかし、この短編のように「疑問を突きつけてくる」作品も大いに評価せよ、という作品に対する評価基準の変更を、「かいつぶり」は突きつけているように思える。それは冒頭のヴォルテールのエピグラムをもじれば、こんな風になる。

「答えではなく、それが作り出す疑問によって、作品を評価すること」

注1：『村上の短編』68～71 ページ。

注2：『村上の短編』122 ページ。

注3：短篇を主にとりあげている『村上春樹一分身との戯れ』や『村上春樹短篇再読』では言及されていないし、『村上の短編』でも取り上げられていない。

注4：以下の議論は『めくらやなぎと眠る女』(2009)の版に従って進めていく。

注5：とても簡単なことばで、水に関係があり、手のひらに入るけど、食べることはできない「か」ではじまる五文字のことばを、是非、考えて頂きたい。ことばの恣意性を実感できる有益なことば遊びである。筆者はびたりとくることばをまだ発見できないでいる。

注6：本年度の「教養講読A」と「教養研究A」で取り上げた。

注7：『村上春樹の短編』の第4章によると、「かいつぶり」と同時期に書かれた「ニューヨーク炭鉱の悲劇」には学生運動の影響が大きいという。希望を持ちながらも大きなシステムに絡め取られ、気がついてみるとそのシステムの一部になってしまっている若者の不条理、という風に学生運動という文脈にもあてはめることができる。

#### 参考文献

風丸良彦(2007) 『村上春樹短篇再読』 みすず書房.

加藤典洋(2011) 『村上春樹の短編を英語で読む1979～2011』 講談社。(『村上の短編』)

酒井英行(2001) 『村上春樹一分身との戯れ』 翰林書房.

村上春樹(1986) 『カンガルー日和』 講談社文庫.

村上春樹(1991) 『村上春樹全作品集1979～1989 ⑤ 短篇集Ⅱ』 講談社

村上春樹(2006) 『はじめての文学 村上春樹』 文藝春秋.

村上春樹(2009) 『めくらやなぎと眠る女』 新潮社.

Haruki Murakami (2007) *Blind Willow, Sleeping Woman*, Vintage Books.

# 家庭教育の再興を願って

— 賢い親になろう —

人間は、生まれ出たときから外界への適応活動を始める。乳児の五感の発達していく過程は、しぐさや表情のかわいらしさもさることながら、その変化の速さと大きさが見る者を逸らさない。しかし、よく見てみると、乳幼児の感情や事物事象に対する認識などは、二歳くらいから発達の度合が顕著になる。したがって、人間がいわゆる人間として成長していくための始発点は、だいたい一年後の三歳くらいと見てよいであろう。このことを人づくりの観点から見ると、三歳という幼児期はその出発点にあたっていているということになる。

さて、幼児期の子育ては、親子の愛着関係をベースとする家庭と、集団社会の生活や活動をベースとする保育園や幼稚園（託児施設、教育施設）が、互いに連携し補完し合って初めて大きな成果を期待することができる。親が子を慕い、子が親を慕い、互いに受け止め合いながら信頼関係を構築していくのは家庭でしかできないことである。これに対して、集団性に対する認識や所属意識などを深めながら次第に自律の度を高めていくのは、保育園や幼稚園でしかできないことである。幼児とて全人的な人間形成の道を歩むわけであるので、家庭が家庭として機能し家庭としての役割をきちんと担い、保育園や幼稚園は保育園や幼稚園で、集団社会としての経験と学びを提供するという使命をきちんと果たす、いわゆる二人三脚の子育てを欠くことはできない。

ところが、近年、二人のうちの一人である家庭の教育力が著しく低下してきた。都市化に伴う自然の減少、効率を求める機械化に伴うせわしなさ、便利さ・合理性優先の生活様式の出現に伴う人間関係の希薄化、価値観の多様化に伴う地域連帯性の弱小化等々、人間性の育成に関して子どもたちを取り巻く環境は理想からどんどん遠のいてきている。携帯電話やスマートフォンの登場、拡大し続けるネット社会、相次ぐ高層マンション建設などは、その最たるものである。そのため人々は、これまでなし得てきた経験の機会や生のコミュニケーションの機会を大幅に

幾田光男

失ってきた。このことは、人々の人間関係調整力を衰退させ、これまで地域社会が有していた行動様式をも消失させた。当然のことながら、子育て世代の人たちの親としての学びと育ちの機会も失われた。核家族化の進展で頼れる親もない中、自分は親としてどのように子どもと向き合ったらよいのか、どのように子どもを導いていったらよいのか、先も見えず不安も大きい。そこで、このような親たちにも、そしてまた、いづれ先々親になる世代の人たちに、子育ての中の楽しさにも触れながら、親として心豊に子どもに向き合ってほしいと願い、具体的な場面を切り取って指針を示そうと考えたのである。

## 親子読書のすすめ — 安心は子どもの読書力を向上させる

明日から十月。園庭頭上の柿の実の色づき始め、秋の深まりを感じさせます。店頭の小刀魚はいよいよ太り、食欲をそそります。食欲の秋、スポーツの秋、読書の秋……、秋は、様々な形で私たちの生活に彩りを添えてくれます。そこで、今回はその中の読書の秋にちなんで、親子読書について述べてみようと思います。

親子読書 — それは、文字通り親子で行う読書です。といっても、図書館で一緒に本を読むというものではありません。時は就寝前、所は家庭の食卓やこたつ、あるいはお布団の中。本は絵本や童話で、対象は幼児から小学生という、親子で一緒に楽しむ家庭内読書のことです。

大人でも子どもでも、自分の用事にひとまずけりがついたときは、ほんの一瞬かもしれませんが、心に安らぎを覚えます。それが、一日の終わり、つまり就寝前ともなれば、その一瞬が「ひととき」に変わります。そのひとときを活用して、五分、あるいは十分、親子で本を楽しもうというものです。

今回は、そんなお勧めです。用意する本は一冊。絵本でも童話でも結構です。

以前に読んだことのある本でも、もうすでにお話の筋を知ってしまっている本でもかまいません。決して難しくない、むしろ易しすぎるくらいの本がよいでしょう。昨日読んだばかりの本でも一向にかまいません。

お風呂から上がった子どもは、パジャマに着替えて歯磨きを済ませます。そして、本箱から本を一冊探して持ってきます。今日はこの本を読んでもらおうと、自分で決めた一冊です。ゆったりとした気持ちの中で、親子読書が始まります。

まずは、お家の人がゆっくりページをめくりながら読み始めます。子どもはじっと黙って聞いています。絵本なら、そのページを見ながら読みましょう。そう、幼稚園でお帰りの前によく行われる読み聞かせです。子どもは、絵を見ながら話に聞き入ります。そして、頭の中にお話の世界をつくり出します。絵はいつの間にか絵でなくなり、実際の風景となって子どもを包みます。登場人物も動き始めます。話しもするし、歌いもします。音も匂いも加わります。想像力が大活躍です。

そのうち子どもはまぶたが重くなってきます。ゆったり感と安心感に包まれて、やがて子どもは眠り始めます。まだお話は途中なのに。(時として、親の方が先に眠くなります。)しかし、それでいいのです。親子読書のいちばんの役割は、このゆったり感と安心感に包まれながらの親子の心のふれあいです。

ゆったり感と安心感に包まれ想像の世界で遊ぶことの心地よさを知った子は、再びその心地よさを求めます。今日もまた読んでほしいと願います。たった十分という時間です。親としては、家事も残務も見たいテレビもあるでしょうが、それらは十分だけ後延ばして、このひとときを保障してあげましょう。

やがて子どもは、自分一人でも本を手にするようになっていきます。就寝前のあのひとときが保障されているからこそ、土曜日や日曜日などにも自分一人で本を開き始めます。それも、以前お家の人に読んでもらったことのある本を。

これは、幼児が母親からの距離を次第に延ばしていく様とよく似ています。乳児はもちろんのこと、一回目の誕生日を迎えても二回目の誕生日を迎えても、幼児は本能的に母親を求めます。母親の姿が見えなくなれば泣き出します。しかし、母親がそばにいて、ときどき優しく声を掛けたり抱き上げたりしていると、やがて母親から離れて自分で遊び始めます。母親の周りを動き回ります。母親はこの営みが続けます。すると、子どもの母親からの距離は次第に長くなっていきます。いつしか母親の姿が見えなくなっても平気になります。それは、子どもは、本能的に、自分を見守ってくれる母親、自分を受けとめてくれる母親がそばにいるこ

とに安心感を抱いているからです。子どもは、心の距離の短さを本能的に確信できているからです。こうして、子どもは独り立ちを始めます。

読書も全く同じです。本好きの子になってほしい、読書力を育てたい、そう思うなら、子どもがいくつになっても、自分から自然に離れていくまでは親子読書が続けてみたらとお勧めする次第です。

### 良識という文化を子どもたちに伝え授けよう

一月十六日夕、東京地検特捜部は、証券取引等監視委員会と合同で、ライブドア本社や社長の自宅など関連施設の一斉家宅捜索に乗り出しました。証券取引法違反容疑による、いわゆる強制捜査です。途端、日本列島に激震が走りました。

ライブドア社長といえば、三年くらい前から急激に話題を振り撒き始めた、まさに「時の人」で、経済界における飛ぶ鳥も落とす勢いの躍進ぶりは、若い起業家たちの心を大きく揺さぶったものでした。そして、それからちょうど一週間後の一月二十三日、今度は社長以下幹部が四人逮捕の報。日本列島は再び激震に見舞われました。

地震は、ライブドア株主たちを直撃しました。株主たちは、大慌てでライブドア株を売り放とうとしました。このことが他の株主たちの焦りを誘い、焦りが焦りを呼んで、市場は大混乱に陥りました。激震は日本経済をも大きく揺さぶったのです。

本震の後は余震です。余震は幾度も襲い来て、彼らの本心を次々と世にさらします。その中に、もう皆さんのお耳に達しているかとは思いますが、聞き捨てならない言葉がありました。「人の心はお金で買える」

思いもよらぬ言葉でした。そのような視点など、夢にも描いたことのないものでした。驚きと同時に強烈な腹立たしさが押し寄せました。しかし、それもやがて嘆かわしさ、悲しさに変わっていきました。そして、なんともいえぬ空しさがわが身を包み込みました。「人の心はお金で買える」——この言葉は、テレビやラジオで何回も耳にし、新聞でも目にしました。報道機関もよほど苦々しく思ったのでしょうか。

どうして彼らはこんな言葉を口にしたのでしょうか。短時間で莫大な資産を手にしてしまったからでしょうか。それとも、思うがままに事が運んだからでしょうか。いずれにしてもおごりが生じていたことは事実でしょう。しかし、果たし

ておごりだけでしようか。

私は、彼らはどうにこのような言葉を発する感覚は持ち合わせていたと考えます。それは、拜金主義的価値観が彼らを覆い尽くし、彼らの行動判断基準があまりにも世間の常識感覚を逸脱しているからです。

彼らの語録を紐解くと、「金を持っているやつは偉い」「金があれば何でもできる」などというのが出てきます。これらはもう、拜金主義的価値観以外の何ものでもありません。そして、彼らの行動を見てみると、その行動の判断基準は、「法が禁じていない。」に行き着きます。人の心情など基準の中には全く組み入れられていません。

普通、良識ある人間は、このようなことは考えもしません。仮に百歩譲って「思いがよぎった」としても、決して口にはしません。ところが、彼らは、口にすればかりでなく文字にまで記しています。口外すれば、そして、文字に記せば、世間からは大反発を食らうわけですが、そんなことは百も承知だというふうなるまいです。彼らの価値観から見れば、世間の反発など犬の遠吠えにも及ばないでしょう。

辞書によると、良識とは「健全な判断力」とあります。この良識は、人々が、人としてのよりよい生き方を、また、人がよりよく生きることができる社会を求める中で、幾星霜を経て築き上げてきたものです。ですから、良識はまさに文化です。そして、文化なら、後世に伝え授けていかなければなりません。人を重んじ、心を重んじて、人々に心地よさを提供する良識観。常識をわきまえ、世間の人々からも快く受け入れられる良識観。子どもたちの健全な成長を願う私たち大人は、今一度自らの良識観を磨き直し、きちんと子どもたちに伝え授けていくではありませんか。

## 感性を育てる(その1)

「豊かな感性、確かな知性、健やかな心身」——繰り返して口にしてみますとどこかで耳にしたような気がしてきます。耳慣れた単語が並びその上語呂もよいため、三つの言葉にリズムが生まれ、初めて耳にしたとしても何ら違和感を感じません。実は、これは、静岡県が掲げる人づくりの指針です。豊かな感性と確かな知性を具え持ち、身も心も健全な人。なんて素敵なお人なんでしょう。静岡県はそんな人づくりを目指しています。

ところで、耳慣れた単語と言いましたが、「豊か」にしても「確か」にしても「健やか」にしても、また、「感性」にしても「知性」にしても「心身」にしても、本当にこれまで幾度となく耳にし、また口にしてきた言葉です。中でも感性は、機械的物質的そして合理的な生活観や行動観が日本全土を覆い尽くしてしまった今日、その谷間に埋もれた心の癒しを求める動きの中で一躍脚光を浴びた言葉です。加えてどことなく美的に響くため、憧れにも似た追い求めがなされた言葉でもあります。

花を愛し花を愛する人、音楽を愛し音楽のあれこれを語る人、人々はこのような人を豊かな感性の持ち主と称します。絵において多くの人が感嘆したり賛辞を送ったりするような作品を仕上げたときも、人はやはり、その人を感性が豊かだと評します。人は、感性とは、美を感じ、美に感嘆し、美を愛する心だととらえます。

それは確かに当たっています。美を感じ、美を愛すれば、心が癒されます。感性は、機械的合理的な生活様式や行動様式が大手を振って歩き始めた今日の社会の中であって、一服の清涼剤の役割を果たすからです。それより何より、成熟社会に突入したとはいえ目を覆い耳をふさぎなくなるような事件が後を絶たない今日この頃、美に感動し美を愛する心が健在なら、誰しも、心は和み癒され、悲惨さとは無縁の世界が訪れると考えるでしょう。心を育てる教育の重要性が声高に叫ばれるのも、その趣旨はこのあたりにありそうです。感性の育成は、まさに心の教育の中核を担っていると言えましょう。

では、子どもたちの感性を育み伸ばすにはどうしたらよいのでしょうか。美に感動し美を愛する心を育てるのだから、うつくしいものに直面させればよい。花を眺めさせたり、きれいな絵を見せたり、美しく心安らぐ歌声や音色に耳を傾けさせればよい。人はまずそう考えます。もちろんそれは間違いではありません。美しいもの心地よいものに触れて感動することは、感性の育ちに欠くことができないからです。しかし、そのとき、その感動をより大きくさせるために心に留めておいてほしいことが一つあります。それは、美しく感じるのとは真反対の感覚、あるいは心地よく感じるのとは相反する感覚、言うなれば「醜」と感じたり「不快」と感じたりする心も、常日頃から大事にしていきたいということです。これは、停電の最中(さなか)突然電気がついたとき、あるいは、暴風雨を丸一日のいだ明るる日、抜けるような空の青さに目をしばたいたとき、電灯の明かりのありがたさをこの上なく感じたり、晴天の嬉しさを普段にも増して感じたりした

ことを思い起こして見れば、後はもう何をかいわんやです。

私たちは、感性というと、とかく美しいもの、清いもの、すがすがしいものなどいわゆる誰もが心ひかれ、好み求めるもの、つまり人々が正の方向で受けとめるものにだけ目を奪われがちですが、その逆の、例えば悪い、汚い、醜いなど、いわゆる負の方向として敬遠されがちなものにもきちんと目を向けて、それはそれでありのままに不快とかいやだとかけしからんなどしっかり感じ取ることの大切さを忘れてはなりません。負の方向にもきちんと反応する感覚が育てば育つほど、正の方向に反応する心も大きく育つのです。

### 感性を育てる(その1)

「園長先生、何してるの。」「棒を立ててるの。」「何で立ててるの。」「きゅうりさんがね、棒につかまって、よいしょ、よいしょって伸びていくんだよ。」「ふうん。」「園長先生、何してるの。」「あのね、きゅうりさんがね、『よいしょ』ってつかまる棒を立てているんだよ。」「どうしてつかまるの。」「それはね、きゅうりさんはね、……。」「ふうん。」

「園長先生、何してるの。」「あのね、きゅうりさんがね、……」

園庭でキュウリの支柱を立てている私のところへ、次々と子どもたちがやってきます。そして、次々と質問を浴びせます。でも、発せられる質問はみな同じ。

「先生、何してるの。」

「何してるの。」—子どもたちの口から最初に出される言葉です。子どもたちは、決まって初めに「何」と問います。それは、目の当たりにしている光景(状況)がどういうものであるか、まずはそれを理解したいからです。

次に子どもたちは、「なんで」「どうして」と問います。目の当たりにしている光景がどのように展開されている必然性を知りたいからです。

そして、「ふうん」。子どもたちは最後にこう言います。「ふうん。」は事が理解できたことを示す合図、あるいは、理解は不十分であっても、理解に対する試みをこの辺で打ち切りたいというときの合図です。意味やことのいきさつがどの程度子どもたちに理解されたかは当の子どもたちでなければ知る由もないわけですが、とにかくこの話題については打ち切りたいというのは、少なくとも子どもたちの主体的意思です。そして、実際に打ち切るのは、場の流れを読んだ子どもたちです。

家庭教育の再興を願って(幾田光男)

ところで、子どもたちは知りがり屋です。好奇心旺盛です。目の前の変化には敏感に反応します。ですから、いつもと違った園長の姿を認めると、すかさずその違いのわけを確かめます。それが、「何してるの。」「なんで……するの。」「なんです。」「なんで……どうして」と問う子ども、つまり知りがり屋の子どもは、その問題へのかかわりが終わるまで、終始主体的です。

大人は、この子どもたちの「何してるの。」「なんで……するの。」「には、とことん付き合ってあげることが大事です。次々と発せられる質問は、一つ一つ大事に受けとめてあげることが大切です。それは、知りがり屋の好奇心は、実は感性そのものだからです。質問を受けとめること、質問の一つ一つに答えることは、感性を受けとめ、感性を育て伸ばすことに他なりません。ぜひとも子どもたちの立場に立って、受けとめてあげよう努めていきましょう。

さらに、子どもは親の背を見て育つと言われていきます。これは、子どもは日ごろから親の立ち居振る舞いを真似て育っていくという意味です。とすれば、親の感性も、またその感性の幅や深さも、いつの間にか子どもに移り伝わっていくということになります。美しいものを美しいと感じる感覚も、すがすがしいものを感じますがしいと感じる感覚も、親の感覚が強ければ強いほど子どもたちにも強く具わります。そして、それらの感覚よりもっと大切な、人のちょっとした気配り、ちょっとした心遣いに気がつき感謝の念を抱く心や、さりげなく気を配り相手や周囲の人をそっと気遣う心、いかなれば人を尊重し大切にするという、心地よく生きていくうえで欠くことのできない思い方も、子どもたちへの具わりは親次第です。

これらの感覚、心、思い方等はまさに感性です。感性もまた「親は子の鑑」。これから育つわが子が豊かな感性を具えていけるよう、私たち親は、ここらあたりでもう一度自らの感覚や心を磨き直す必要があります。

### 子どもの気持ちが汲める親に

「ママ、来るかな。ママ、来るかな。あ、来た。ママが来た。ミカちゃん、ほら、ママが来たよ。うれしいな。うれしいな。うれしいな。」

保育士のA先生は、「うれしいな。うれしいな。」を繰り返しながら、抱っこしていたミカちゃんを揺るようにして強く抱きしめました。お母さんのお迎えを待ちわびて半べそ状態に陥っていたミカちゃんも、途端にっこり。A先生の見

事な演技に乗せられて、ミカちゃんのお母さんに対する思いは、それまでの寂しさや不安から喜びに急転換。そして、その喜びは急上昇。キャッ、キャッと、声まで発し始めました。

「今晚は。お帰りなさい。お迎え、ご苦労様です。」

「どうも。」

「さあ、ミカちゃん。ママがお迎えに来てくれたよ。うれしいね。忘れ物はないかな。じゃあ、明日、また元気で来てね。さようなら。」

「さようなら。」

「ミカ、行くよ。何ぐずぐずしてんの。さっさとしなさい。」

ミカちゃんが靴を履くの見届けたA先生は、ミカちゃんの立ち上がりを追うように顔を上げました。すると、そのとき、A先生の視界に入ってきたのは、歩き始めたミカちゃんと、ミカちゃんの三々四々メートル先を行くお母さんの後ろ姿でした。そこには静寂あるのみ。二人は言葉を交わすこともなく、門の外へと消えていきました。A先生は、二人の後ろ姿を見送りながら、こみ上げてくる涙を抑えることができませんでした。

これは、かねてから親しくしていたある保育園の園長先生が、私に語ってくれた話です。園長先生は、この光景が脳裏に再現されたのでしょうか、話の途中から声が震えだしました。それにつられてか、聞いている私までも目頭が熱くなってきたしまいました。私の脳裏にも、私自身まるでこの場に居合わせたかのように、様子が鮮明に描かれていたのです。

園長先生と私は、思いを語り合いました。二人の思いはもちろん同じ。共感することしきりです。

夜七時、ミカちゃんは、寂しさをこらえてお母さんのお迎えを待っていただろうに……。それを察したA先生は、お母さんのお迎えの時刻が近づいたとき、ミカちゃんの期待をふくらめ喜びを大きくしてあげようと、一緒になって喜んであげたのに……。五秒でもいい、三秒でもいい、なぜ抱きしめてあげないのか……。なぜ一言「ミカちゃん、えらかったね。」と、声をかけてあげないのか……。ミカちゃんの寂しさは、お母さんの五秒、三秒の抱きしめで救われるのに……。ミカちゃんの頑張り、お母さんのひと言で報われるのに……。本当にわが子が好きならば、本当にわが子をいとおしいと思うなら、たとえどんなに疲れていても、仕事が終わればいち早く自分を待っているわが子のもとへ飛んでいき、声をかけ

たくなるだろうに……。抱きしめたくもなるだろうに……。

子どもの気持ちが汲める親——それは、子どもたちが最も強く求めているものは、自分を受けとめ包んでくれるお父さんとお母さんだと知っている人なのです。子どものころの自分を思い起こし、そのときの思いをわが子に重ね合わせることでできる人なのです。

### 抱っこするこころをいとわない

九月二十五日、各紙は一斉に北海道札幌市の幼児虐待死事件を報じました。犠牲になったのは、四歳、三歳の幼い姉妹で、死に至らしめた男は、しついで暴行したら死んでしまったと供述しているようです。詳細については何も分かりませんが、二人とも顔や体に数箇所ずつ殴られた痕があったと記されています。四歳、三歳というと、うちの園児たちと同じ年。もうかわいそうでかわいそうで、かける言葉も見つかりません。この子たちは、果たして、どれくらい親に甘えることができたのでしょうか。どれくらい時間、親の胸で眠ることができたのでしょうか。

二学期最初の日、赤組さん(年少児クラス)のノリちゃんは、お母さんに手を引かれてやってきました。「ノリちゃん、おはよう。」そう言いながら、私はしゃがんで、いつものように両手を差し出し、ノリちゃんを迎え入れようとしていました。ところが、今日は違います。いつもはにこにこしながら私の胸に飛び込んでくるノリちゃんが、今日はお母さんにしがみつきます。見ると、目の周りが濡れています。状況を察知した私は、さっと手を引っ込め、こう言いました。「ノリちゃん、うれしいね。お母さんと一緒。お母さん、お部屋まで来てくれるよ。お母さん、どうぞごゆっくり。」

同じく赤組のケイちゃん。ケイちゃんは、いつもと変わらぬ笑顔で幼稚園にやってきました。お母さんの笑顔も変わりません。お母さんは、いつものようにケイちゃんを靴箱のところまで送り届けました。そして、また、いつものように引き返そうとしました。そのときです。ケイちゃんはさっとお母さんの袖をつかみました。「あれ、どうした。お部屋に行かなくっちゃ。」そう言ってお母さんは、ケイちゃんの手を自分の袖から離そうとしました。その途端、ケイちゃんは堰を切ったかのように泣き出しました。突然の困惑に覆われたお母さん、笑顔はとっくに消し飛んでいました。「お母さん、お部屋までついてってください。お時間が

許すようなら、ケイちゃんももういいよと言うまで一緒にいてあげてください。」私はそう言って、お母さんをお部屋の方へ促しました。それからどのくらい経ったでしょうか。お母さんは、にこやかな表情で門を出て行きました。二学期が始まって一週間くらい経ったある朝のことでした。

白組さん（年中児のクラス）のリコちゃんは、門の直前で門をくぐるのを拒みました。お母さんはリコちゃんの背中を押しますが、リコちゃんは足を踏ん張って、お母さんの押しに逆らいます。いつもののにこりコちゃんとは大違い。目には涙を浮かべています。聞くと、バスより先に園に着くんだと、家から頑張っ

て歩いてきたが、もう一步というところでバスに追い越されてしまったので、悔しくて泣き出してしまったとのこと。その悔しさのぶっつけ場所がお母さんだったのです。

ノリちゃんにしても、ケイちゃんにしても、リコちゃんにしても、大人からすればどれもたわいのない涙のように見えます。しかし、当の本人たちにしてみれば、襲い来る不安や挫折にも似た悔しさに起因する真剣かつ必死の涙なのです。子どもたちは、まだ生まれて三年、四年、五年しか経っていません。時にどうしようもない心細さに襲われます。そして、その心細さに打ち勝つことができないから、しがみついて泣くのです。

抱きしめてあげてください。抱っこしてあげてください。やがて子どもたちは安心を取り戻し、地に下りたいと訴え始めます。地に下りた子どもたちは、自ら親元を走り去ります。安心が小さな自信を生み、その自信がそうさせるのです。そして、しばらくして、また心細げに戻ってきます。そして、また抱っこしてあげてください。抱っこされることによって安心というエネルギーを補給した子どもたちは、再び走り出します。こうして子どもは成長していくのです。

### 楽しませてあげる親から自分も一緒に楽しむ親に

終日雲一つなく、真っ青に晴れわたった空。これぞ青空。これぞ秋空。天高くとはこういう空をいう。そんな空の下で行われた今年の運動会。子どもたちは自分に自分を出し、空のお日様のように輝きました。そんな子どもたちの姿を夢中になって追い続けるお母さんたち、そして、お父さんたち。お母さんたち、お父さんたちの目は、子どもたち以上に輝いていました。子どもたちが踏みしめ、駆け跳ね、舞うグラウンドには、子どもたちの充足感もさることながら、お母さん

家庭教育の再興を願って（幾田光男）

ち、お父さんたちの充足感も満ち満ちていました。

お母さんたちの充足感といえば、未就園児親子種目の「握手でこんにちは」におけるお母さんの身振り手振りの中に、そして、在園児親子による「友達賛歌」におけるお母さん、お父さんのダンスの中に、ひととき大きく漂っていたように思います。

わが子と一緒に「握手でこんにちは」を踊っているお母さんの顔は、どの顔も一様に微笑んでいます。それは、わが子がかわいくてたまらない、わが子の身振り手振りの一つ一つがいとおしくてたまらないといった顔です。そんなお母さんに誘われてか、子どもたちもみんなにこにこ顔です。そのにこにこ顔が、またお母さんの笑顔を誘います。これはもう、子どもを楽しませてあげるお母さんの域をとくに超えています。お母さん自身も子どもに負けじと、自ら踊りを楽しんでいきます。私はそんなお母さんが大好きです。そんなお母さんを見ると、私自身うれしくなってしまう。子どももきっと同じでしょう。お母さんの楽しそうな顔は、子どもにとっても最高にうれしいプレゼントです。

在園児親子の「友達賛歌」におけるお母さん、お父さんも同じです。「一人と一人が腕組めば、……」とうれしそうに踊っている親子の姿は、見る人に幸せ感を提供します。そのとき、子ども以上に軽やかにステップを踏むお母さん、お父さんの姿は、幸せ感に加えて見る人を躍動美の世界へと誘（いざな）います。もちろん子どもは、お母さん、お父さんが自分を受けとめ一緒に踊ってくれることに、大きな喜びを抱きます。その子どもの笑顔を見て、お母さん、お父さんの足取りは、軽さに拍車がかかります。ここでもお母さんたちは、子どもと一緒に自らも楽しんでいっているのです。

話を、子どもにとっていちばん身近なお母さんに絞ってみましょう。子どもは、自分の目を見てちゃんと話を聞いてくれるお母さんが大好きです。一緒に遊んでくれ、遊びを一緒に楽しんでくれるお母さんが大好きです。つまり、自分を受けとめ包んでくれるお母さんを求めているのです。このようなお母さんの下では、子どもは安心感に浸れます。心が安らぎ、やがて自ら行動を起こす（自立の促進）ためのエネルギーを蓄えます。

世の中のお母さん方が、みんなこのようなお母さんだったとしたらどうでしょう。子どもたちの自立のためのエネルギーはどんどん満たされていって、あちこちで「満タン」の聲が上がるでしょう。子どもたちは自分自身が充足するだけでなく、充足の喜びをお母さんにも分け与え、お母さんにもエネルギーを生ませる



でしょう。「握手でこんにちは」や「友達賛歌」を踊っていたお母さんたちの姿は、まさに子どもたちに活力を生ませ、結果として自分自身も活力を生むお母さんの姿だったのです。

運動会の代休も過ぎ、続いての子育てフェアも終わって、子どもたちが久々に登園してきた十月十二日の朝、一人のお母さんがおっしゃいました。「『かぶいて踊ろう』(年長さんの踊りの題名)を踊っている朝比奈先生の踊りに見とれてしまいました。本当に上手なんだから。」お母さんたちと同じようにここにも、豆絞りを外れ落ちてしまっても夢中になって踊っている子どもたちの姿に、自分自身一層燃え上がった教師が一人いたのです。

### お部屋、暑すぎませんか。

「わあ、暑い。いったい何度あるの。」

居間に通された瞬間、暖気に包まれた私は、思わず温度計を探しました。今まで外にいて外気に接していたため、余計にそう感じたのかもしれませんが、それでも暑い。暖かいという状態はとうに超えていました。

その日はまさしく小春日和と呼ぶにふさわしい日で、朝から風もなく日差しはやわらかで、陽だまりで花の手入れなどしていたら汗ばむような、そんな陽気でした。

温度計は壁の隅に掛けていました。見ると、二十二度。居間では、四歳になる男の子がプラレールで無心に遊んでいました。が、顔は真っ赤。着ているベージュのジャンパーが、丸く膨らんで見えました。

男の子は、線路を継ぎ足そうとして、走らせていた列車のスイッチを切りました。その途端、部屋には静寂が訪れました。そのときです。私の耳に小さな機械音が飛び込んできました。エアコンの音です。外の日の光が部屋の中まで暖かくしていたのかと思いきや、この暑さはエアコンのせいだったのです。改めて目を南に転ずれば、居間は玄関のそのまた奥。日の光は、ここまでは届いてはいませんでした。

かつて「文明とは、便利さ、都合のよさの生み出しで、人間は手を抜き棄てるもの」「文化とは、手を加えて作り出すことで、人間が創造の喜びや生きがいを感じるもの」と聞いたことがあります。私たちは、これまで、寒ければ着て寒さを和らげるという方法をとってきました。また、体を動かして暖をとるとい

こともしてきました。これは、まさに文化です。着る、動くという自分自身の働きかけによる、いかなければ建設的生産的行為を通して、自分で自分の暖をつくり出してきたのです。

これに対して、エアコンは機械が暖を供給します。スイッチこそ自分の手で入れますが、後は機械が暖を生み出し、送り届けます。ですから、エアコンは労苦を伴いません。人は、労苦を伴わないまま快適さを得られます。いわば文明です。この労苦を伴わない快適さの獲得が、今やあまりにも多く人々の生活を支配しています。電気による照明しかり、電子レンジによる加熱即席食品しかり、ちょっとそこまでの自動車しかり。そして、その快適さは、いつの間にか慢性化し、過剰供給をもたらします。その一例が、冒頭の暖房です。

快適さの慢性化、供給過剰は、やがて人々の快適さを感じる感覚を麻痺させます。それは、同時に、恩恵に対する感謝感覚も麻痺させます。感性、心情の退化した機械人間の誕生です。

お子さんは、今、この感性心情退化症状を呈してはいませんか。それより何より、お父さんお母さんご自身が、感性心情退化人間と化してはいませんか。朝の冷気の中を行き交う「おはよう」に人のぬくもりを感じたり、店頭に並ぶ真白な大根に、手を赤くして土を洗い流している農家の人の顔を思い浮かべたりするような感覚など、とうに忘れてはいませんか。

寒かったら、まずは着て寒さを和らげましょう。おいしい味噌汁を飲みたかったら、自分自身で味噌やだしを調査しましょう。自分で手がけて暖をつくり、自分で手がけて味を生む。わが子を、主体的能動的に立ち向かう子に育てたいのなら、まずは親自身が自らの生活態度、生活習慣を改めていかななくてはなりません。「親が変われば子が変わる」――子育ての不易な指針といえましょう。

### まんわりでもない自分 ―― 自己肯定感の醸成

新しい年が明け、精華幼稚園は五十二回目の新年を迎えました。今年も子どもたちの豊かな育ちを願い、新たな気持ちで保育を展開していきたいと思えます。本年もご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

ところで、昨年は、暗く悲しいニュースの多い一年でありました。悲惨な飲酒死亡事故、火災、県の首長を巻き込んだ談合等数々ありましたが、中でもわが子を前にして無関心でいられないのが、中学生の自殺事件でしょう。報道されるた

びに、多くの人たちが、なぜ、どうして、と声を上げ、死に追いやった人たちを憎む前に、救えなかったことに悲しさを、手を差し伸べられなかったことに悔しさを募らせたことでしょうか。私の場合など、立場上これまで多くの子どもたちとかわって来たせいも、面識もないのに当の子どもたちの顔が目には浮かぶよう、何とも言いようのない虚しさに包まれたものでした。そして、同時に、この子どもたちの後ろにいる親御さんたちの心を思わずにはいられません。ご家族の方々にとっては、このお正月はお正月ではなかったことでしょう。

私は、この子どもたちの冥福を祈りつつ、この子どもたちの死を無駄にしないためにも、うちの園児たちにとってこれから必要な指導はどうあったらいいかを考えました。行き着いたのは自己肯定感の醸成です。

当の子どもたちは、体こそ大人と違わなくても、物心ついてからまだ十余年しか経っていません。したがって、自分に対する目、周囲の人たちに対する目は、私たちのように幅を有しません。自己がある程度確立されている私たちなら、あの人はああ言うけど私には私なりの考えもあるんだからと、安易に人に流されることが少なくなりそうです。しかし、自分がまだ十分育っていない彼らは、自身自身に頼り切れず、したがって、他人の声を強く受け止めてしまいます。自分自身が虚弱なため、他人の声を聞いて思い込んだ思いは、私たちの想像をはるかに超える強いものとなっていきます。見方によれば純粹です。一途です。ですから、一度思い込んだ思いを覆すには、その思いの強さを上回る納得が必要になります。ところが、崖っぷちの心境に至っている人間の思いを覆す強い納得など、そう簡単に用意できるものではありません。自分などいなくてもいいんだ、自分は必要な人間なんだという自己否定の思いの方がはるかに上回り、自分で自分にかける自己暗示の強さが加速します。

それを未然に防ぐのが、幼少時からの自己肯定感の醸成だと考えます。「僕って、結構いいじゃない。」「私って、まんざらでもないわ。」「僕は僕でいいんだ。」「私は私が好きなの。」こんなふうに分を見つめられる、こんなふうに分を受け止められる、そんな子どもたちであったなら、子どもたちは、崖っぷちに立つことはないでしょう。

この際、もう一度わが子への対し方を見つめ直してみたいかがでしょう。もちろん、いけないことはいけない、心がけなければならぬことは心がけなければならぬ、人の道を諭すことは大前提ですが、その上で、親自身がわが子を好きになり、わが子を人として認め受け止め抱きしめる、そんな対し方を今一度

意識化してみてもとお勧めします。いわゆる親自身のわが子に対する肯定感の醸成です。お前はいい子だ、お前は素敵だ、お前はそれでいいんだというわが子に対する肯定的な受け止めは、子どもに間違いなく自尊心を芽生えさせます。芽生えた自尊心は、自分の中にまんざらでもない自分を発見させ、自分への自信を増大させていきます。

### 人形に対する心、まんざら

灯りをつけましょぼんぼりに お花をあげましょ桃の花

五人ばやしの笛太鼓 今日はそのしいひな祭り

今日も、子どもたちの歌声が園内に響きます。春の訪れを知らせるこの歌、「うれしいひなまつり」。私は男ですが、子どもたちからこの歌が大好きでした。今でもこの歌を聞くと、明るさを増した春の日差しが降り注ぐ故郷の家の縁側に目に浮かんできます。庭先には、確かに桃の花もありました。奥の部屋には、古びた、それこそ陶器のお雛様が飾ってありました。菱餅や雛あられ用の餅つきもしました。その雛あられは毎日祖母に煎ってもらい、その後一ヶ月にも及ぶうれしいおやつとなりました。

私が子どものころは、車もほとんどなく、もちろん石油ストーブやエアコンなどはありませんでしたから、暖をとるといえば火鉢ぐらいで、夕げ時ともなれば、かまど周辺が格好の居場所となりました。子どもは風の子と言われますが、その子どもの私ですら日暮れ時の寒さには勝てず、ぬくもりを求めてかまどのそばへ寄っていったものでした。そのころの冬の寒さは今とは比べ物にならないくらい厳しく、家の北側に置いた水桶の水など、終日溶けることなく、そのまま次の夜を迎えてしまうというありさまでした。ですから、「うれしいひなまつり」の三番にある「金の屏風に映る灯をかすかに揺する春の風」という一説がこのほかに響いて忘れ難く、春近しのうれしさになつかしさも加わって、今でも一瞬にして私を遠い昔にタイムスリップさせるのです。加えて短調の調べが、一層の郷愁を誘います。

ところで、ひな祭りといえば、主役は何といってもお雛様。私たちは、大事にしまっておいた雛人形を取り出し、飾ります。一年ぶりにお目見えした雛人形は、今年もまた私たちに、そして、再会を待っていた子どもたちに、変わらぬ微笑みを投げ掛けます。

雛人形の取り出しを見つめる子どもたちのまなざしは、取り出しているお母さんたちのそれと同じように、一様に優しげです。そして、人形を手をさせてもらえたときなど、必ずといっていいほどにっこり目になって、人形の目を見つめます。

子どもたちは、お雛様が大好きです。いや、お雛様に限らず、人形が大好きです。人形遊びなど始まれば、「さあ、チーちゃん、いい子ね。お洋服着替えましょうね。」「チーちゃん、ご飯ですよ。いっぱい食べましょうね。」などと、もうまるでお母さんです。掛ける言葉も、まさに愛情のかたまりです。養育義務や育児責任などが云々されるような世の中ですが、子どもたちの言葉は、そのような世界とは無縁です。喜びと自信と主体性が満ちあふれた慈しみの世界の言葉です。見れば、手つきも様になっています。子どもたちがついこの前まで母や祖母から受けた扱いです。それがそっくりこの人形たちに授けられています。もちろん、一つ一つの手の動きに、母や祖母から受けた愛情をそのまま託しながら。

この愛情の投げ掛けは、ぬいぐるみに対しても同じです。優しげな子犬や子猫などのぬいぐるみにそっとほほを寄せるしぐさは、基本的には先の人形に対するそれと同質です。この子たちに、動物虐待や子ども虐待など起こるはずはありません。

子どもは親の背を見て育ちます。たとえ人形であろうとぬいぐるみであろうと、その扱いが命ある人の子、犬の子に対するそれと同じであれば、子どもたちは、人形遊び、ぬいぐるみ遊びを通して、自ら命を大切にすることを育みます。

### 「日本のテレビ、これで良いか」——静岡新聞「論壇」より

一カ月前の五月二十九日、静岡新聞朝刊の「論壇」に、ニューヨーク大学名誉教授・東京大学客員教授佐藤隆三氏の「日本のテレビ、これで良いか」と題する論評が掲載されました。常々思うところと相容れる内容であったため、わが意を得たりの心境に至りました。次に再現してみます。

#### 娯楽性を競い合う民放

テレビ番組はその国の縮図だという。日本に長く住んでいた米国人夫妻が少数のグループのための天覧歌舞伎に招かれて来日した。一カ月近くマンションを借りて日本で生活した。夫君(大学教授)は日本の演劇研究者、夫人はハーバード

大出身の日本語翻訳家で共に知的親日家である。久しぶりに会った両人が最初に発した言葉は「日本のテレビはひどいね」であった。

これは大方の日本人も常々感じていることだ。この夫妻の発言ではないが、日本の液晶テレビ等のハードは良いが、番組(ソフト)は米国に比べて断然劣っている。

先ず、東京の例で見ると、NHK受信料を払って見られるチャンネル数は民間五局、NHK関係五局である。一方ニューヨークでは、一定の受信料を支払うだけで約百チャンネルを見ることが出来る。数が多いことが必ずしも良いことではないが、日本の民間五局は特長がなく、同じ人がどのチャンネルにも一日中顔を出している。全局が競って追求しているのは「面白けりゃ良い」という娯楽性だけだ。

米国で百チャンネルもあるのは、それぞれが差別化の原則に従って特化した番組を作っているためだ。三大ネットワーク(ABC、CBS及びNBC)でさえもニュース番組以外は独自の企画で競争して視聴率を上げようとしている。原則的に司会者やタレントが局を渡り歩くことはない。

三大ネットワークは今ケーブルTVに視聴者を奪われている。特にニュース部門では、CNN、フォックス、MS・NBCは一日中世界からのニュースを即刻伝えている。三大ネットワークの夕方の三十分ニュースは臨場感がないとされている。

CMのない公共テレビは視聴者の寄付で賄われているがNHKのような幅広い番組制作はできない。ドキュメンタリーの規模も小さく、莫大な予算を有しているNHKには太刀打ちできない。

前述の夫妻によると、NHKの衛星・デジタル放送は質が高いが、視聴率を気にする必要のないNHKとして一般の番組も民間局と競って低俗に墮してほしくない、とも言っていた。

#### 民主主義思考培う役割

米国の百に近い番組の中にはもちろん俗悪なポルノ番組もあるが、スポーツ、料理、古い映画、学術的なもの、議会中継、歴史、歌、演劇等、あらゆる分野を網羅している。加えて、宗教や異なった移民グループを対象とした特殊な番組もある。スペイン語、中国語、韓国語は言うに及ばず、TVジャパンと称する番組は一日中日本のNHKニュースや民法番組を取り混ぜて放送している。

米国のテレビはまさに国の営みの縮図である。この観点からすると、日本のテレビの単一性も民族の均質性を表すもので重大視する必要なし、との主張もあろう。だが、テレビメディアの影響は強大だ。学校の教育以上に恒久的に人々の思考体系を変えるし、テレビの知名度如何で政治さえも変わる。

やらせや虚偽の報道は断然許されないが、真実を二つの対立的な観点から議論する習慣は日本に根付いていないようだ。ある問題が起きると、各局がその道の権威の意見だけを横並びで報じる。つまり、民主主義的思考を国民の中に培うことが日本のテレビの究極の役割なのである。

### 心までは奪われない価値基準を

先月号の「日本のテレビ、これで良いか」（静岡新聞の「論壇」より転載）に関連するお話です。平成十二年の十月、当時勤務していた城北小学校の学校だよりに先の論壇と同様の思いを綴ったことがあります。自説ながら読み返してみても、私たち大人は子どもたちのためにもっと賢くならなければと、改めて思われます。ここに再現してみます。

先月号で、今日の若者や子どもたちに捨て置けない問題点を生じさせた最大の責任者は私たち親であり大人であって、私たち大人のものの方や考え方、つまり価値観がそのまま子どもに反映されている旨を述べましたが、テレビもまた大きな影響を与えていることを見逃すことはできません。もちろんテレビ番組も大人が制作しているので、これも広い意味では大人の責任ということになります。が……。

「ご存じない方もいらっしゃると思いますが、かつて「てんぶくトリオ」というお笑いグループに、三波伸介というタレントがいました。今は他界されていますが、口の周りを黒く塗ってはおかぶりなどしながら登場する様はいかにもこっけいで、その表情、しぐさを見るだけで人々は笑い転げたものでした。そのメンバーには伊東四朗も加わっていて、この方は今でも活躍中です。もっと古くなりますが、「てなもんや三度笠」では、藤田まこと、白木みのるが人気を博していました。芦屋鷹之助、芦屋小鷹、藤山寛美、三木のり平、森繁久弥などといった面々も茶の間に笑いを提供してくれていました。

彼らのつくり出す笑いには共通点があります。彼らは、自らがどじを演じ観客

家庭教育の再興を願って（幾田光男）

を笑わせたのです。彼らは、劇の中でどじ役に徹し、一生懸命演じました。観客は、それが演技であるため、演技のうまさに感心しながらも安心して笑うことができました。そればかりか、笑った後には爽快感さえ感じることができました。彼らはそのために常日頃から研究を重ね、稽古を積み、楽屋裏でも真剣に打ち合わせをしていたのです。

ところが、今日の番組の中では、登場者は、人の笑いを誘うのに相手の短所を指摘したり、相手を卑下したり小馬鹿にしたり、あるいは下品この上ない行為をとったり言葉を吐いたりしています。飛び交う言葉も日本語の美しさなどまるでお構いなし、語法上も間違いだらけです。そして、挙句の果ては「死ぬ」「殺すぞ」などの言葉も飛び出す始末です。低俗極まりない有様です。観衆・聴衆はさぞかし目をそむけていることだろうなと画面を見れば、驚くことに会場に詰め掛けた観聴衆まで大騒ぎしているではありませんか。番組を制作する人、出演する人、そして、それを見る人、中には少女たちも交じっています。ほとんどが若い大人たちです。彼らの価値観がここまで低下したかと思うと、空恐ろしさを感じます。いや、空恐ろしさなど通り越して虚しささえ感じます。このような出演者は、出演しているときだけでなく、おそらく私生活の中でもそのままの感覚で過ごしているのでしょうか。真面目さ、正直さ、真剣さなどが馬鹿にされる今日の風潮は、こんなところからも生まれてきているのでしょうか。人をこけにして笑いを誘い、自らもそれで楽しむといったこのようなテレビ番組は、いじめを助長させる上でも大きな影響を与えているはずですよ。

今、テレビ番組は視聴率アップに躍起になっています。したがって、テレビ番組の低俗化は、さらにエスカレートしていくでしょう。テレビ画面に目を奪われても、心までは奪われない価値基準を、まずは私たち親が態度で示していくことがありませんか。

### 運動会は心を育てる格好の機会

「えっ。心を。それって、体の間違いじゃないの。」

こんな声が聞こえてきそうな今回の題名です。いえ、間違いではないのです。三歳、四歳、五歳の園児にとって、運動会は、紛れもなく心を育てるチャンスなのです。

運動会といえば、玉入れあり、綱引きあり、リレーありで、それこそ日本中ど

こへ行っても、赤勝で、白勝で、フレ、フレ、フレとみんなで競い合います。精華幼稚園も例に漏れませんが、園全体が、青組、白組に分かれて競います。玉入れも、綱引きも、リレーも行います。

子どもたちは、今のうちから大盛り上がりです。練習であっても、行うたびに「えい、えい、おう。がんばるぞう。」と氣勢を上げます。そして、競っている最中(さなか)は、まさに真剣そのものです。いつも力を出し切ります。順番を待っている子も、「〇〇ちゃん、がんばれえ。〇〇ちゃん、がんばれえ。わあ。わあ。」と大賑わいです。

白組さんと緑組さんのお部屋の前の廊下は、見る見るうちに子どもたちで埋まります。お庭の盛り上がり気付いた先生たちが、子どもたちを引き連れて応援に駆けつけるからです。年中さんの前の廊下は、打って付けの観覧席です。観覧席からも声が上がります。「青組がんばれ。青組がんばれ。」「白組がんばれ。白組がんばれ。」

そうこうしているうちに、競技は終わります。すると、そこでまた大歓声。「結果を発表します。青の勝ち。」「わあい。」同時に、観覧席からも「わあい。」

お庭では、勝った子どもたちが小躍りして喜んでいきます。その横では、負けた子どもたちが口をつぐんで、小躍りしている子どもたちを見つめています。中には、目をこすっている子も見受けられます。悔しさ、悲しさに耐えようとしているのは、一目瞭然です。実は、これがねらいです。どちらの姿も私たちが願う子どもの姿なのです。

私たちは、子どもたちに、人間性豊かな人に育ててほしいと願っています。人間らしさと心の豊かさを与えた人になってほしいと願っています。この心の豊かさを与えた人とは、人はもちろんのこと、周囲をゆったりと受けとめ、じっくりと受け入れることのできる広くて深い心を持ち合わせている人のことを指します。そして、そのような心を与えるには、人の心の動きが、あるいは感情が、実感として分かることが大切です。人の感情が実感として分かるためには、まずは、自分自身が人としての感情を当たり前に抱き、またその感情を当たり前に表せる人間であることが欠かせません。嬉しいときは嬉しさと、悔しいときは悔しさと、悲しいときは悲しさと、楽しいときは楽しいと素直に感じる、いわゆる喜怒哀楽の感情です。この喜怒哀楽の感情を、豊かに抱き豊かに表出できることが必要です。

運動会の競技は、全てが思いどおりにいくとは限りません。勝つときもあれば

負けるときもあります。だけど、子どもたちは、全て勝とうと一生懸命です。努力もするし工夫もします。だから、結果を得たとき、喜びも大きければ悔しさも大きいのです。子どもたちは、このことによって自ら感情の泉をかき回します。その結果、心が鋭敏になり、感性が高まります。まだ三・四・五歳の幼児です。他人の心の動きにまで思いを馳せることはできませんが、やがて成長して、他人の喜びや悲しみ、悔しさや憤りにまで思いを巡らすことができるようになるための素地は十分耕されます。

精華幼稚園は、常に学びと育ちの連続性を追い求めています。小学校、中学校、高等学校等と先を見通しながら、つまり子どもたちの人としての成長を見据えながら、その成長の度合づくり、裾野づくりに精を出しています。そのために、今は毎日が運動会です。十月七日に向けての毎日が、子どもの心の育成時なのです。

### 泣くことは大事な自己表現

「ママ、バイバイ。」「えっ、ここでもいいの。」「いいの。バイバイ。ママ、帰って。」朝の幼稚園正門前。私のお迎え抱っこを終えたサクラちゃんは、地に足を下ろすなり、意を決したようにお母さんに向かってこう言いました。小さな弟を乗せたベビーカーを押しながら、いつものように門をくぐるうとしたお母さんは、突然の帰宅指令にただただびっくり。そればかりか、にこりともせず真顔で話すサクラちゃんの口調にたじろぎすら覚えたふうでありました。しかし、賢いお母さん。瞬時に子どもの心の内を読み抜きました。

「はい、はい、わかったよ。バイバイね。行ってらっしゃい。」お母さんは笑顔でこう応え、一人で門をくぐって靴箱に向かうサクラちゃんを見送りました。

「様子を見てこなくてもいいですか。」脇で事の始終を見ていた私は、お母さんにそう話しかけました。「いえ、今日はここで帰ります。見つかったらあの子の立場がなくなってしまうから。」「一年前が懐かしくなりますね。でも、明日はまたママと一緒に来てっていうかもしれないよ。そのときは、またついていってあげてください。」「ええ、そうします。言ってくるといいですけどね。では、よろしく願います。」「そうやって引き返したお母さん。先ほど浮かんだ寂しげな表情は、もう消えていました。

そうしている間も、幼稚園の中には泣き声が響き渡ります。泣く子を抱っこして、園舎の中を歩いて回る保育者(教師)。一人おんぶして、一人手をつないで

園庭に出て行く保育者。四月恒例の園風景です。

私は、引き続き門前で登園親子を迎えます。「おっ、来た。来た。サッチャン、お早う。」私は、しゃがんで両手を広げ、お母さんの手を離して走り寄ってくるサッチャンを迎えます。「園長先生、お早うございます。」振り向くと、自転車をこいでくるお母さんの後ろから声がします。「おっ、その声はテルちゃん。テルちゃん、お早う。」お母さんの後ろにテルちゃんの手が覗きまします。パッチン。テルちゃんと私の手のひらも、元気な朝の挨拶を交わします。

「じゃあ、よろしくお願いします。」年長さん、年中さんとパッチン挨拶を交わしている私の脇を、年少さんのお母さんが、どこか後ろ髪を引かれるような面持ちで通り過ぎます。「はい。行ってらっしゃい。」そう言ってお母さんを送る私の後ろから、ママ、ママ、わあん、わあん、と声が追いかけてきます。

「お帰り。今日は泣かなかった。大丈夫だった。がんばれた。」バス停で、わが子が降りてくるなりこう問い掛けるお母さんに、「お母さん、泣いていいんです。泣きたいときは泣かせてあげてください。我慢させちゃだめです。」と、間髪入れず諭すように伝える添乗当番の教師。「えっ、そうなんですか。」お母さんは、驚いたように教師を見つめます。「バスが発するので、また今度お話ししましょう。じゃあ、ミッチャン、さようなら。」まだ十名くらいの園児を乗せたバスは、次のバス停に向かいます。

精華幼稚園の職員は口を揃えてこういいます。「泣いてしっかり自分を出せている子は、やがて落ち着き、幼稚園を楽しみ始めます。今まだ頑張りつつある子は、そのうち泣き始めます。心配なのは、一度も泣いたことのない子、泣くことのできない子です。」

泣くことは大事な大事な自己表現です。特に、初めて親元を離れる三歳児にとっては、幼稚園といえども先の見えない世界です。不安と緊張は計り知れないほど大きいでしょう。ですから、泣くのは当然、泣いて当たり前です。「お帰り。あら、泣いちゃったんだ。よし、よし。」そんなとき、賢い親は、これまで抱いていた不安と緊張を振り払ってあげようとして駆け寄ってくるわが子をしっかりと抱きしめ、しばし安らぎの空気で包みます。子どもはやがて、いつものわが子に戻ります。お母さんは、子どもの安心は、お母さんの共感的受けとめから生まれることを知っているのです。

子育てを安易に委託に出さないで！

「へえ、ヒロちゃん、スイミングにも行ってんだ。」「うん。空手もやってるよ。」「ええっ。空手も。」

降園時、バスを待つ子たちと言葉を交わしていた谷澤先生は、ひよんなことからヒロちゃんのおけいこ種目を知ることになりました。ヒロちゃん、確か体操教室に参加していたっけ。そう思った谷澤先生は、スイミングという言葉が出るなり「へえ、スイミングにも」と感心して見せたのですが、追い討ちをかけるように「空手」まで飛び出すと、今度は本当に驚きに変わってしまいました。驚きついでにさらにきいていくと、出てくる、出てくる。空手に続いて、ピアノが出てくる、英語が出てくる、公文が出てくる。お絵描きが出てくる。受けとめる谷澤先生は口をあぐり。そばで聞いていた私も耳がダンボになりました。結局おけいこの数は全部で七つ。

気を取り直して、谷澤先生は聞き返します。「ねえ、ヒロちゃん。今言ったおけいこ、みんな好き。みんなおもしろい。」「嫌い。」「えっ。みんな嫌いな。」「あっ。一つだけ好き。」「一つだけ。それは何。」「体操教室。」「体操教室。どうして。」「おもしろいもん。」「体操教室はおもしろいんだ。体操のほかはおもしろくないの。」「おもしろくない。」「水泳も空手も。空手なんかおもしろそうだから、弾けるようになると楽しいと思うけどなあ。」「弾けなくなっちゃった。遊びたい。」「ヒロちゃんとの会話はここで途絶えました。子どもの本音を耳にした谷澤先生は、これ以上きくのは酷と思ったのでしよう。さっと話題を変えました。「さあ、みんな。なぞなぞするよ。虹のようにきれいだけど、すぐに割れてしまう風船ってなあんだ。」

かつて学校に勤務していた頃、次のようにおっしゃったお母さんがいらっしました。

「うちの子、字が雑でしょうがないの。習字にでも行かせようかしら。」「剣道って集中力をつけさせるのいいと思わない。うちは、四月から入れることにしたの。」「うちの子、ちっとも本を読まないの。本読みの力をつけてくれる塾ってないかしら。」「

上手、集中力、本好き、読書力……。お母さん方は、わが子にこんな習慣を、こんな力をと、一生懸命です。お母さんは、真剣な顔で情報収集に努めます。で

も、ちょっと変です。わが子の行く末を案じ、あれこれ方策を講じようとしていることは分かりますが、その方策は他人に託すことで、自らは何らかかわろうとしていません。子育ての方向に思案は巡らすものの、子育ての具体は他人任せです。

子育ては、本来親の仕事です。親は、ミルクの飲み具合や便の硬い、軟らかいを見届けます。顔色や表情から、わが子の体の調子や心の調子を推し量ります。自分の目で、自分の耳で、自分の手で子どもを受けとめ、いとおしんでそっと話しかけます。子どもが少し大きくなれば、子どもを認め、褒めてあげます。愛の叱責も躊躇しません。子どもが喜びを抱けば、親も共感して一緒に喜びます。親は一貫して子どもと共に歩みます。

ところが、子どもがさらに成長してくると、親は、わが子の能力面が気になり出します。すると、途端にその育成を他者に委ね始めます。特定の能力については、専門家に任せるほうが効果的だと考えるのでしょうか。いわゆる子育ての委託化です。しかし、果たして全てが本当に効果的といえるのでしょうか。確かに能力そのものは一時的には伸びるでしょうが、子どもの意思に反するおけいこ通いは、先のヒロちゃんの言葉が示すとおりです。成就感、充足感、有能感が伴わなければ、意欲という名の前進的エネルギーは生まれません。そればかりか、今ある意欲すら減退の危機にさらされます。好きこそものの上手なれ。おけいこ事は、子ども主体で、子どもの関心度と相談の上という姿勢で臨みたいものです。

### 子育ての手引き ― 亀の甲より年の功

今年柿の裏年。こうちゃんちの柿の木も、実は一つしか実りませんでした。それでもその一つだけの実は、ふっくら膨らんで、大きな立派な柿になりました。「こうちゃん、柿が『もう取ってもいいですよ』って。『みんなで仲良くたべてねえ』って。取ろうか。」お庭で草取りをしていたおばあちゃんが、手を休めて言いました。

こうちゃんは、柿の木を見上げました。おいしそうに色づいた柿が一つ、しなっただ枝の先にぶらさがっています。おばあちゃんはこうちゃんを抱っこしました。柿がこうちゃんにぐんと近づきました。おばあちゃんはこうちゃんを抱っこしたまま、左手を伸ばして柿をつかみました。そして、ぐるりぐるりとひねり始めました。「ほら、こうちゃんもひねってみて。」おばあちゃんはこうちゃんを促しま

した。こうちゃんは、両手を伸ばして柿の実をつかみました。ぐるり、ぐるり、ぐるり。こうちゃんは、おばあちゃんと一緒に柿の実をひねりました。

ぽろっ。柿の実が枝から離れました。柿の実はこうちゃんの手の中に納まりました。「さあ、取れた。大きいねえ。おいしそうだねえ。こうちゃん、床の間のおばあちゃんに『おいしい柿ができました』ってお知らせしようよ。」こうちゃんは、両手で柿の実を支え持ち、おばあちゃんと一緒にお家の中に入りました。床の間には、大きいおばあちゃんの写真が飾ってありました。こうちゃんはおばあちゃんと一緒に、柿を写真の前に据えました。「なむなむ。おいしい柿ができました。みんなでいただきます。」おばあちゃんが手を合わせて言いました。「なむなむ。おいしい柿ができました。みんなでいただきます。」まねしてこうちゃんが言いました。

「さあ、みんなでいただきます。おばあちゃんが皮をむくから、こうちゃんはお皿に乗っけてね。おじいちゃんとおばあちゃんとパパとママとこうちゃん。何個に分けたらいいかな。」こうちゃんは、ただただしく両の指を使って数え始めました。「おじいちゃんとおばあちゃんと、パパと、ママと、こうちゃんと、ゆうなちゃんと、ううん、ううん、六個。」「そうか、ゆうなちゃん(赤ちゃん)も入れてあげるんだね。」

「ただいま。」お母さんが帰ってきました。「ほら、こうちゃんの好きなりんご、買ってきたよ。」お母さんは、買い物袋から真っ赤なりんごを一つ取り出しました。そして、こうちゃんに手渡しました。りんごを手渡されたこうちゃんは、りんごを持ったまま奥の部屋に走っていきました。おばあちゃんとお母さんはそのぞいてみました。「なむなむ。おいしりんごができました。みんなでいただきます。」床の間の前でこうちゃんが手を合わせていました。床の間の写真の前には、先ほどのりんごが据えてありました。

おばあちゃんの誘いざないと促しに、こうちゃんは今日も体験の幅を広げます。柿をもぎ取ること、柿の重量感を感じることを、誘いの言葉に乗せられてまさにおいしそうだと感じること、柿を供えて先祖を敬うこと、感謝すること、さらにもた、家族みんなで分け合うこと、家族の絆を感じ、自分もまた家族の一員と感ずること……。感謝する心、尊敬する心、家族一人一人を大切に思う心。おばあちゃんは、自分が子どもの頃授けてもらった感覚や心を、今度は孫に授けます。それも、ほとんど無意識のまま、至極当然のこととして。

人生経験の長い人には、一朝一夕ではとても身に付けられない素晴らしい感覚

が具わっています。私たちが忘れかけている人の道の指針となるような心を持ち合わせています。昔から、亀の甲より年の功と言われます。年配者の立ち居振る舞い、後ろ姿は、子育ての黄金の手引きと言えましょう。

### ミミちゃんの贈り物

「ええっ！」受話器を取った中田先生が驚いたように声を上げました。居合わせた先生たちは一斉に顔を上げ、声の出所を追います。「はい。」「はい。」「そうですか。」職員室には、電話を受ける中田先生の声だけが響きます。先生たちは、耳を澄ましながらか中田先生の表情をうかがいます。

「分かりました。気をつけてお帰りください。」中田先生は、受話器を置きました。先生たちは、中田先生の応対振りから、電話の主は谷澤先生だと理解しました。と同時に、事の推移も察しました。しかし、誰も口を開きません。職員室はしばし静寂に包まれました。

平成二十四年十二月十九日午後四時、ウサギのミミちゃんは十年にわたる生涯に幕を下ろしました。子どもたちに愛されたミミちゃん。と言っても、毎年一学期の間は、新入園児たちのたいたたり引っ張ったりする手荒な扱いに堪え忍んできたミミちゃんは、その子どもたちがやがて成長し卒園していく様を幾度となく見つめてきました。「ミミちゃん、僕が入園する前からいるよ。だって、『あそびの日』に来たとき、ミミちゃんいたよ。」こんな声をよく耳にします。ミミちゃんは、未就園の子どもたちからも慕われていました。

そんなミミちゃんに、昨年夏ごろから変化が生じてきました。食欲にむらが出始めたのです。秋には腫瘍の摘出手術も受けました。「ミミちゃんもお年だからね。」そんな言葉が私たちの口癖にもなってきました。十歳というと、ウサギにとってはかなりの年齢と見ていいようです。

十二月に入ると、ミミちゃんの容態の悪化がはっきりと見て取れるようになってきました。食欲が落ち、元気もなくなってきたのです。ケージにもたれかかっているような姿を見かけることも多くなりました。体の上下動が大きくなり、息遣いも苦しさを感じられます。それでも意識は確かで、人が近づくとすつと頭をもたげ、鼻をひくつかせて食べ物をねだるような仕草もして見せました。ミミちゃんの気丈さが自ら奮い立たせているようで、見守る私たちは胸が締め付けられました。

そんな矢先の十二月十二日、ミミちゃんは獣医さんのところに運ばれていきました。体の上下動がさらに激しさを増してきたからです。

ミミちゃんの中村先生、桃子先生に抱かれて、獣医の岡本先生を訪ねました。レントゲン検査によって肺に水がたまっていることが判明し、ミミちゃんはその水を五十CCほど抜いてもらいました。あの体からして、五十CCはかなりの量といえます。しばらくしてミミちゃんは幼稚園に帰ってきました。帰りを待ちわびた私たちは、穏やかな息遣いで水を飲むミミちゃんを見て一様に安心しました。

しかし、その安定も長くは続きません。十四日にはまた肩の動きが大きくなりました。ミミちゃんは再び岡本先生宅に運ばれました。抜いた水は三十CC。さらに三日経って十七日にはまた五十CC。ミミちゃんの容態は悪化の一途をたどりました。そして、十九日、ミミちゃんは病院で息を引き取ったのです。その日連れて行った谷澤先生と中村先生は、途中で花を買い求め、ミミちゃんを抱えて泣きながら幼稚園に帰ってきました。「お帰りなさい。」言いながら先生たちも泣きました。

明くる日、私たちは子どもたちを遊戯室に集めました。これを機会に、子どもたちに、死と死の悲しみを知ってもらいたいと思ったからです。ミミちゃんは、一緒に過ごした子どもたちに身をもって死を教えてくれたと考えます。つまり、ミミちゃんの死は、ミミちゃんからの子どもたちへの贈り物と考えます。「最後のお別れです。ミミちゃんをよく見てあげてください。」私の呼びかけに、子どもたちは、花に包まれて静かに眠るミミちゃんに次々と手を合わせます。遊戯室に子どもたちのすすり泣く声が響きます。